統一

第百九十五號

御國體に就て

海軍大佐　佐藤鐵太郎君

日蓮上人畢生の主張

大僧正　本多日生師

法華經に云く

其れ衆生あつて、佛の壽命の長遠なること是の如くなるを聞いて、乃至能く一念の信解を生せば、所得の功德限量あること無けん。

日蓮聖人云く

法華經を信せざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り此の經を信ずる者の前には滅後たりと雖ども佛在世なり。

御國體に就て（天晴會講演）

海軍大佐　佐藤鐵太郎君

第　演

私も何かの御緣で、天晴會の末席を汚すことになりましたので、トウ〳〵こういふ演壇に上ることになりましたのは、御耻かしくもあり、又嬉しくも感ずるのであります。全體から申せば、この演壇に上つて御話を致しまするのは、學德兼備の御方でなければならぬ筈で、殊に今日は萬人が師匠と仰ぐべき三宅先生と、本多大僧正祝下と御同列に致すと云ふのでありますから、ドウも樣衡がとれぬので、尙更恐縮の至であります、實は、昨年納會の節、來年の發會に何か申上る樣に、本多祝下より御話がありましたが、大に閉口致しましたので、餘程御斷り申上ようかと存じましたが、併し、考へて見ますれば、旨くやりましようと思ふから、恐れもあり辭退も致すのでありますが、有の儘を申上げて、先輩の方々から御批判を仰ぐつもりとすれば、何もはにかむ譯はないので、自分の申す事は、徹頭徹尾感心させようなどゝ云ふ野心があればこそ、六ケ敷のであるが、ドウせ聞く人も、しやべる人も、其分量丈けに聞たり、言たりするので、イクラ能辯でも、自分の思ふことをそのまゝに言ひ顯はすことは出來ません、況して、末學の一書生で、且不慣でありますので、到底、自分の意志を十分に顯はすことは出來ませんが、幾分なりとも御解りになりさへすれば、ソレで宜いので御座りまする。これは、一層憶面なしに申上るに越したことはない。間違たことを云ふたら、後とは云はず、今直に先輩の方々が、直して下さるだらう、モシ〳〵してきまりの惡い樣な顏をするのが、第一に日蓮主義の違反ではありますまいか、殊に今日は、小笠原の父の命日で、私の爲にも大切な日でありますから、一ッ大氣焰を吐くのも、何かの報恩になるのだらうと思ひますので、大に愉快を感じながら參會致したのであります。

昨年の納會の節、松本君から、私を皆樣に御紹介に

なりましたとき、海軍の國防論者、海軍に於ける日蓮主義の鼓吹者など云ふ、六ヶ敷肩書を頂戴致しましたが、成る程、國防論者としての私は、或は御列席の方々よりイクラか多くの研究したかも知れませんが、日蓮主義の鼓吹者と云はれて見ると、少く狼狽せざるを得ないのであります。日蓮主義としては、此前に御話になりました、加藤咄堂先生の仰の樣に、門の近傍にウロ〳〵して居る位なら、マダ〳〵宜しう御座りますが、私のは本統の門外漢であります、併し、私としてもまんざら日蓮大聖人の御事蹟を、少しも知らぬと云ふ樣な、遠方に離れて居る譯ではありませんので、日蓮大聖人を景慕するの念を起しましたのは、大分古いのであります。私がマダ兵學校生徒の時分に、房州の清澄山に登つて、日蓮と云ふ御方は、餘程エライ人だ、先第一着手として、御自分の御師匠樣を、得度しやうと云ふ程の大抱負を持て居られた方であるので、自信力の強のと、抱負の高のに大なる景慕心を起したのであります、其の後同郷の友人高山林二郎氏が日蓮上人を研究すると云ふので、一種の快感を覺へたのでありますが、ドウも同人の研究振りが、意に盈ちませんので、同氏より啓發して貰ふと云ふ樣な心が、出來ませずに終つたのでありますが、其後子供を連れて上野に散歩に參りましたら、なんでありませうか、リン〳〵した聲で演說をして居る人がありますから、何事か知らんと思つて近て見ましたら、大きな杉の根本に、日傳取り風の人と、書生風の人一人と、それから分らん樣な人一人と、都合三人シヤガンで聞いて居るばかりであるが、一人の若い僧さんが、千人萬人の聽衆を得たる如く、氣焰萬々丈の體で說法をして、其の背後に南無妙法蓮華經と書た旗を立て居るので、私も生來未だ覺ざる快感を起し、日蓮大菩薩が鏖倉の四辻に立て、妙法を說かれたる有樣を思ひ遣り、無限の快感を覺へ、不思ッコに佇立して、說法を聞たのでありますが、無心なる子供に促されて、本意なくも其前を去つたのでありましたが、果して何方でありましたらうか、後の御若い御僧は能度立派なる、法華經行者と

なられたでありましようか。又後の三人も亦必ず熱心なる法華經信者となつたので御座りましやう。ソレから後、私は大の日蓮ずきになりました、法華經行者の大勇猛大精進を想見して、自分も又如斯き勇猛無比なる大決心を以て、御奉公をせなければならぬと云ふことを感じました。

餘り序文が長くなりますと本論が短くなりますから、こんなことは、先これ位にして御國體の擁護と云ふことに就て、私の信ずる處を申上樣と思ひますが、先其の前に少々申上げなければならぬことが御座ります。

私の御國體に關する信念は、決して學問的研究の結果ではありませんので、考證を主とする歷史家や、理論を主とする哲學者國家學者等より御覽になつたなら杜撰と認むべき點が、定めて多からうと思はれますが、ツマリ私の信じまする處は、色々の點から自然と打建てられたので、決して日本の古代史研究の結果ではありませんので、ツマリ一種の動機より神佛と云ふことを思ひ出したのが原因であると思ひます。こんなことを申上ましたなら、嘘かし幼稚なことを云ふ男である、御前は神佛の存在を信せぬかと仰らるゝ方も御在になるであらうと思ひますが、我々共は、一時物質萬能主義に魅せられて、神佛などゝ云ふことは、一向に浮ばぬ時代がツイ此頃まで續たので、ヤット神佛のことを考初めたのはこの十年位のものであります。私共が戰爭に參りますと、色々の方から御守りを下さいますが頂戴したまゝ机の引出しに入れて置く位が通例でありますが、ドウ云ふ譯か、私はそれが嫌であつたのであります、何も机の引出しの安全を御願申そうとて、送つて下さつたのではありませぬから、送つて下さつた方に對しても、からだに附けて置かなければならぬと思ひましたので、腹卷の中に入れて、終始身に添へて居ることに致しましたのでありますが、その內、ドウ云ふものか急で腹卷を換たり何かするときに忘れて仕舞つて、新い腹卷に入れないこともありますると、その事を思ひ出すと、ドウしても其儘に居ることが出來

ませんで、ドウしても早速部屋に歸つて、お守りを入れなければ安心が出來ぬ、それは、決して人の親切を無にせまいと云ふ、最初の考ではありませんで、ドウしても御守りを身につけなければ安心が出來ぬ、と云ふことになつたので、今日でもショッチユー腹卷に入れてあります。今日に考て見ますると、此事などもイクラ神佛があつて、我々の運命を支配して居らるゝと云ふ觀念を崩した證據には相違なからうと思ひます。ソレに、今一ッ私の心を動かしましたのは、私が二十七八年戰役に從軍中、私の國元の氏神が山王樣でありますが、その神官の富樫と云ふ人が、武運長久を願ふ爲、嚴冬の際をも顧みず、はりつめたる氷をわつて、毎朝川の中にはいつて水ごりをとつて、拜で下さつたと云ふ話で、私の友人が、一日獄にまいりまして、富樫さんの首を遠くから鳥と思ふて近よつて見ましたら富樫さんなので、大に驚いたと云ふ樣なこともありましたので、如何に神靈の護護を確信したる宮司の所業かと思ひますると、自分ながらあり難くてたまらぬ樣に存じましたので、これなども神佛に對する觀念を生じたる一原因かと思ひまする。それから後は、別に何と云ふ考もありませんで、年月を過したのでありましたが、日露戰爭のとき、どうした譯か、敵の彈丸が自分の船に中る樣な氣がして、思はず知らず煙突を盾に四五步步だのであります、煙突など何の役にも立ませず反つてあぶないのであります。けれども敵が見へぬと何となく安心な樣な心持になるので、自然そうやつたものと見へますが、そのとき自分ながら鄙怯千萬と思ふて叱つたのでありますが、それと同時にこう云ふ觀念が突然と起さて參つたのであります、露西亞人は、此船に當てようと思つて打つには相違なからふが、決して私にあてようと思ふて打ちはせぬ、併し時としては私にあたるかも知れぬ、併し露西亞人が例令私に中て樣と思ふても、到底中ることは出來ぬ、又一方より考へて見ると、例令敵の彈丸に中ろう〳〵と思ふても、そううまくは行かぬ、それと同樣に中るまい〳〵と思ふても、矢張中るかも知れない。これはどうして

も人力の沙汰ではない、何物か我々の運命を支配するものがあるに相違ないと云ふ樣な、理窟張た考が突然と起きたのであります。それから後は、何となく生死の觀念が薄らいだ樣に覺へまして、自分ながら心持よく感じたのであります。二十七八年戰役のとき、それようも尙一層劇烈な場合にはいりましたのに、別に今申上た樣な感を起したことがありませんのに、幾邊も戰門に臨みました後に、今の樣な鄙怯な考を起すと云ふのは、自分ながら恥入る次第でありますが、それと同時に、どうしても神佛と云ふものはあるに相違ないと思ふてこれを信ずる樣になりましたのであります。其の內朋友が六ヶ敷本を見せて呉れました。それは昨年の納會のとき、加藤咄堂先生の愉快な御話で承りました、維摩經であります。この間加藤先生の御話に、維摩經と法華經と極めて密接なる關係があると云ふことがありましたが、私の國體觀もどう云ふ譯か先生の仰らるゝ通り、維摩經と法華經と御國體と云ふ風に、關聯したのであります、此間の御演說には、一人の愉快を感じました。この間加藤先生もお話になりました通り、維摩經と云ふ御經は、文章は如何にも立派の樣に存せられますが、中々解らない文章で、到底如私ものゝ學力では、讀みこなす譯には參りませんが、併し、私は本を讀むことに就きまして、一つの說を持て居ります。人によりますると、本を讀むと直に消化するのでなければ、讀むでもだめであると云ふ人もある、それからまた、ムヤミに註釋いぢりをして、分らないものを無理にも分らせ樣とする人もある。それから又、全體を讀まんければ何もならないと思ふて、初めから讀まない人もある。中々こんな大冊なものは、讀んで居れないから、眞平だなど云ふは、普通に耳にする處であります。併し、私の考は全然反對であります。勿論本を讀で直に消化すると思ふのは、ひが事であります。讀でかみしめてから、自然と腹の中にこなれまするので、何人でも、消化して參りまする具合が、一々わかる譯のものでありませんが、何時の間にか、自分の血になり、肉になつて働て居るのであります。其

れから又、なんでも一種ばかり讀みましては、到底大なる利益を得ることは出來ませぬ、肉ばかり食つて居ると廢血症になると同樣に、色々のものを混合して讀んでこそ、健康なる智識が得られるのであります。それからまた、むやみに註釋いおりをして分らないのを、無理に分らせ樣とするのは、丁度「タカヂアスターゼ」を飲で、消化させると同樣で、タマに具合の惡ひときに用るは宜しう御座りますが、何時も〳〵持藥として飲みますると、消化力が衰へて病的になると同樣に、本を讀むにも註釋いおりばかり致しますると、矢張健全な智識を得られないで、物事ばかり覺えて、一向實行が出來ぬと云ふことになりまして、丁度運動をしたり、或はまた料理方に注意する樣に、之を實行して味ふて見たり、先輩の講義を聞て、ほどよき消化具合にして致しまするのは、別段でありまするが「タカヂアスターゼ」、主義の讀み方では宜しくないと思ひまする。要するに、我々の本を讀みまするのは、決して村夫子になりすまして、妙な聲を出して、人を敎へようと云ふのではなし、自分の修養のためでありますから、尙更無理やりに分らせるの必要がありませぬので、自分の修養の程度に適當な具合に進歩すれば、其で宜しいのであります。それから又、中々こんな大冊のものは讀めないと云ふて讀みませぬのは、丁度佛說にも御座りまする通り、昔ある人が、咽が乾はきましたので、水を覓めて大きな池に參りましたが、そこに參りまするとと、水面を睨んだまゝ呑うと致しませぬ。そこで傍に居りました人が、御前はあんなに咽が乾たと云ふて、其でこゝに來たのになぜ飲まぬかと云ふて、聞いて見ました處、彼者が答へて「若し、飲み盡くし得べくんば、これを飲まん、然るに此の水極めて多くして、盡すこと能はず。是の故に我れ飲まざるなり。」とやりましたので、其處に居あはせました人々が、皆な嗤らうたと云ふ話が御座りまするが、是れと全たく同樣で、皆な解らぬからと云ふて、讀まんのは大に愚物であります。そこで私は考へます。必らずしも牛一匹を丸呑みにせんでも、牛の味の分からぬ筈がない。

何處でも齒の立つ處を嚙しめて見さへすれば、牛の味は大底わかるのであります。舌の味はどうだ、腦味噌の味はどうだ、或はまた「オックステール」の「スチュー」はどう云ふ味かと云ふ樣な、專門的のことは分らぬと致しましても、何處でも一箇處嚙み占めて見ますれば、大底の味がわかるものであらうと思ひまする。私の本の讀み方は、全體こう云ふ風でありまするからイクラ六ケ敷ものでも御座りましても必ずかぢつて見ます、そうして一箇所でも齒が立さへすれば、それを嚙みしめて見ますのでありますから、維摩經の樣な六ケ敷ものでも、少しも閉口は致しませんので、たゞ無意味にそれを讀みました處が、イクラか味が出て參りました。それは十大弟子の落弟は釋尊の命は絕對的に信じなければならぬと云ふ、軍人的の觀念よりも自分の優勝劣敗を憚るゝからである。菩薩達のも矢張同樣であります。文殊菩薩のはそうではありませぬ。維摩詰も云ひました通り、「不來相而來不見相而見」と云ふ鹽梅に、兎に角腹には成算がありましたかも知れませんが、勝敗の念を絕ち、「雖然當承佛聖旨諸波闍疾」と云ふて行かれたのであると云ふことと、それから又全體が何となく、維摩居士舍利弗に申しました、「不斷煩惱而涅槃」と云ふ樣な鹽梅なことを說てあるのであるといふ風なことや、それから又維摩居士の所爲は、絕體である。時間も空間も凝滯する處がないといふことやら。又あの樣な奇蹟、例へは「以須彌之高廣內芥子中無所增減」と云ふ樣な、不可思議解脫法門やら、「十方國土所有日月星宿於一毛孔普使見之」と云ふ樣なことは、必竟三寸の蟲取玉も、宇宙の萬象を映して殘さぬと同理である。一厘一毛の少さな蟲取玉でも、これは同理である。其の見ないのは、映らぬのではなく、見るものゝ罪であると云ふ樣な感想を起したのでありましたが、それと同時に、不二の法門のことに就ては、必竟如何と申して見ますれば、所謂言語道斷心思格絕で、どうしても維摩の「默然無言」が本道の妙境であると云ふ樣なことも、腦氣に分つて參りましたので、どうしても面白くてたまりませんので、なんでも二三邊繰り

返して讀ました。どうも六ヶ敷ので全體を讀破する譯には行かずに居りますると、また一人の友人から、法華經要品と題したる御經を呉れました。此友人は、其後直に戰死を致しましたが、第一艦隊司令官の先任參謀をして居りました、松井と云ふ中佐であります。全體この人は、そう云ふ觀念を持て居らぬのでありましたが、何と思ひましたか、私に手紙を添へて、「此場合に於てこの經を讀むものは、大兄の外無之存候に付、託幸便供御覽候」と云ふて送つて呉れたのでありました。そこで私は非常な興味を感じましたので、直にそれを讀み初めたのでありましたが、註釋も何もなく佛語などは少しも知りませんので、大分讀み惡く感じましたが、文底何となく威嚴がありまして、何となく維摩經以上のものに相違なく感じましたから、一寸一口で申すれば、維摩經は何となく、わざとらしい處があります、して、霸氣滿身と云ふ鹽梅に見へまするが、法華經の方は、一言一語畫く威力がありまして、何となく主氣盈滿とでも、評し度樣な心持でよくも分らぬくせに、卷を置くも惜い樣に感じましたので、とう〳〵壽量品迄讀み進めたので御座りましたが、「今釋迦牟尼佛、出釋氏宮、去伽耶城、不遠坐於道場得、阿耨多羅三藐三菩提、然善男子、我實成佛已來、無量無邊、百千萬億、那由佗劫……中略……それから、「自住是來、我常在此、娑婆世界、說法敎化、亦於餘處、百千萬億、那由陀、阿僧祇國、導利衆生、」と云ふに至りまして、時間を絶し、空間を絶したる大理想に逢着しこれを「コンサルウエージョン、オフ、エナージー」に關する、科學上のことに對照しつゝ、思はず知らず感嘆の聲を發したのでありましたが、更に讀み進んで、「自我得」の處に參りまして、「爲度衆生故。方便現涅槃。而實不滅度。常住此說法。我常住於此。以諸神通力。令顚倒衆生。雖近而不見。衆見我滅度。廣供養舍利。咸皆懷戀慕。而生渴仰心。」と云ふに至りまして、更に大歡喜を起し、これと同時に、卷を覆ふて暫しは默想に耽つたのでありましたが、飜て讀誦品の、「如來脫離、三界火宅、寂然閑居、安處林野、今此三界、皆

是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此處、多諸患難、唯我一人、能爲救護、」の佛勅ありしを思ひ、不知不識欣慕の念を生じ、何となく肉顫き血沸くが如く感じましたが、この動機により、私の御國體に關する觀念が涌出でましたので御座りまする。

退て此世界の過去及現在の有樣を考て見ますれば、凡そ世として澆季ならざるはなく、强國互に相對峙致しまして、互に相滅し殆んど一日の平和だもない位であります、成る程優勝劣敗は、世間の實相でありまするから、これも是非がないのであります。草木の繁りまするのも、枯れ落て仕舞まするも、悉く皆優勝劣敗の結果であります、雪の降るのも消へるのも、風の吹くのも波の立つのも、皆これ優勝劣敗の道理であります、諸行無常、盛者必滅、一として優勝劣敗の作用にあらざるはありませぬ。乍去如茲き變化は天地自然の通則で、柳が綠、花は紅と同樣、殊更に慘眉の觀念を起すべき患難と云ふのではありませぬが、實際人間の致しますることは、中々そうでは御座りません。一國一家の興廢に伴ふ大戰爭大紛擾の如きは、必ず云ふに忍びざる極惡悲道の出來事を伴ひまするので、他の一方には如何にも泰平に樂み幸福に歡ぶ國や家がないとも限りませぬが、要するに世は澆季たるを免れないのは實際の有樣であります、されば如來も、「今此處多諸患難唯我一人能爲救護」と仰せられたので、如來が御出にならなければ、中々に極樂淨土常寂光土にはなれないのであります。乍去如來は、何故にこの穢れたる世界を淸淨ならしめ得べき、御力を御備へ遊ばすのでありましようか、唯我一人能爲救護と仰られたるは、他の人にては救護の任に堪ざるを明言せられたのであります、するが、何故に如斯仰せられたのでありませうか、此點に關する觀念は、如來は絶對なり。時間を絶し、空間を絶し、常住不滅にしてこの三界を有せられ、父の如く母の如く、我等衆生を愛育し賜ひ、且我等を敎へて、三界の火宅を通れ出させ賜ふとの一事を以てするの外、如何にするも了解し得られませぬ。言を換へて之を云ひますれば、如來の如此大作用力を

有せらるゝは、絶對にあらせらるゝが爲であります。相對的關係を第一若くは第三者に對して有せらるゝならば、到底如此大作用力を有せられざるは無論であります。絶對位より生ずる相對なればこそ、相對者との間に於ける諸關係は、平和の狀態に結了せらるゝので、其の究極に於て相對の意義を脱すること能はざる兩者の間には、互に相讓り相和するの外、其の關係を平和に維持すること能はざるは無論でありまするので、從て主裁的に平和を維持することが出來ませぬ。從てまた諸の患難より衆生を救はるべき大作用もないのでありまするが、如來は絶對位であらせられまするが故に、此國土の御主人でもあり、我々人類の父母でもあり、また我々の救ひ主でもあらせらるゝのでありまするから、從て衆生を患難の狀態より救ひとらるゝの大妙力を有せらるゝであると信ぜなければなりませぬ。

元來絶對の二字は、解釋の仕方によりては、大分六ケ敷ので、何となく玄妙なる意味を有して居るかの如く見ゆるのでありまするが、極めて平易に解釋致して見ますれば、相對の意義を絶したと申す迄の事で、「唯一」も絶對であり、無交渉則無相對も絶對であります。時間を絶したるものは、時間的に絶對であります。空間を絶したるものは、空間的に絶對であります。勢力を絶したるものは、勢力的には絶對であります。假令他の意味に於て、相對の關係を有するも、他を以て替ゆること能はざるものは、皆悉く絶對であります。例へば、唯一の意義より申ますれば、森羅萬象悉く皆絶對であります。富士山は如何にするも富士山で、乍畏日蓮大聖人は、如何にするも日蓮大聖人であらせらるゝので、高いからと申しましても、富士山と云ふ譯には參らぬと同樣に、高德であらせらるゝと云ふても、ドナタをも同樣に日蓮大聖人と申上る譯には參りませぬが、此の絶對の意義を有しまするものは、無限の威力を以て爭ひを鎭める力があります。例令ば、東鄕大將は絶對に、東鄕大將であります。世の大將を知らざる人々相集りて、東鄕大將は、果して誰なるかを論爭致しまする際に、もしも同大將が、其の面前に

顯はれ、「我は則ち東鄕なり。」と仰られましたらば、如何なる爭論も一瞬間に結了致しまして、實に平和の狀態となりまするのでありましよう、また沒交渉とか無交渉とかの意味合より考て見ますれば、假りに稀鹽酸と亞鉛とを一緒に致しますれば、瞬くひまに、猛烈なる化學的作用を起し、大熱を生じ、沸騰しつゝ水素を發生するのでありまするが、もしもその間に、極めて薄い玻璃板を置きまして、直接の觸接をしませぬければ、戰爭の如き大活動は乍ちにして收まり、速かに安靜なる狀態に復するのでありますが、是れ皆酸類と玻璃と、玻璃と亞鉛との間には何等の交渉もなく、相互に何等の影響をも受けざるの致す處で、もしもこの際、玻璃の代に他の木片とか、鐵片とかを以て致しましたなれば、一時は酸類と亞鉛との交渉は開始せられずに居りまするが、木片及鐵は、決して酸類の影響を受けぬ譯には參りませんので、先この間に戰爭が始まり、終には、亞鉛と酸類との直接交渉が開始せらるゝので御座りまするので、つまりは大爭亂を發するので御座りする。私は全然これと同樣であるとは申しませんが、絶對力の活動に就ては、大なる趣味を有して居りますので、我御國體の解釋に關しましても、亦この意義に據りませうと存じまするので、つまりは、世界の大平和は統治上絶對の意義を有する、最高主裁者の御威德御稜威の下に打建てられて、繼續するであらうと信ずるのであります。

さりながら、前にも申述ましたる通り、元來騷亂の根絶し難きは、世間一般の常態でありますので、天に三日の晴なく、地に三君の年なしと申傳へて居りまするが、一家若くは一國が、其の平和を維持するが如き情態に於ては、假令世界の大とは申しながら、強ち平和なるを期し難きものではなからうと思ひまする。ただに之を思ひまするのみならず、是非とも之れを期成致すべきは、人類の本分であると考まする。果して左樣で御座りまするならば、如何にせば、之を求むることが出來るで御座りましようか、もしも眞理は萬有を一貫して悖らざるものと致しますれば、爭の端を絶し

たる絶對者の主裁する處は、永久に平和なるべき道理であります。

例へば心の定まれる人は、常に寧靜なるが如く、定りたる主裁者を奉戴する國家の平穩無事なるが如し、世界にも一の靈位が御座りまして、萬邦擧て之を奉戴するに至りましたならば、世界は疑もなく泰平なるべき道理であります。勿論、局部々々の小波瀾は、一家内の小波瀾と同樣根絶すること困難なりとは申しながら、世界の大平和は疑もなく、持續し得らるゝと考へまする。言葉を換へて申して見ますれば、人の主心の他の機能に對し、絶對的主裁力を有するが如く、一家の主人の長幼自ら序ありて、絶對なるが如く、眞の王者は、富力兵力德力智力を以て、其の位地を動かすこと能はざるの靈位にありまするが如く、もしも世界に於ても統治的に、絶對の意義を表すべき靈位ありて最高主裁者として立たれたならば、世界の平和は期せずして求め得らるゝであらうと思ひまするのであります。例令ば一家内に於ける事情に就て申して見ますれば元來父兄なるものは、天來の父兄に御座りまするもので子弟を以て之に代ることは出來ません。父は子に對して絶對的に父であります。如何に腕力あるも、如何に富有なるも、如何に智識あるも、如何に如何なる靈力あるも、子を以て父に易ることは、到底出來ませぬ、此絶對なる天來の資格あればこそ、一家の平和を維持することが出來るのであります。もしも腕力家に行はれ、或は富力智力の優劣を以て家長と定むるが如きことありましたならば、一家の爭亂は到底免るゝことが出來ませぬ。語を換へて申して見ますれば、有德王となるの義は、大德と庸德との爭論を起し、强者王となるの主義は、强弱相喰で王位を爭ふことになりまするので、如斯相待的競爭の意義を有する主權者は、到底永遠に王たること能はざるは、勿論の義に御座りまするので、簒奪興亡の行はるゝに從ひ、國家の大爭亂を見るに至るは、自然の結果であります。之に反しこれ等の爭端を絶したる主義者が御座りますれば、この御方は常に神聖にして、永久に平和の保護者たるべく、世界

の平和を永遠に維持し得べき靈位は、此の大德德を有するにあらざれば、到底占むること能はざるは勿論の次第で、如何に雄大なる勢力を有するにもせよ、ナポレオンケーザー者流の汚すべき座にあらざるは、勿論のこと、大聖釋迦、孔子、耶蘇の如き、また禹湯文武、堯舜の如き方々とてもまた決して踐むべき處ではありませぬ。富にもあらず、兵にもあらず、德にもあらず、智にもあらず、凡そ是等の諸力を絶したる、一種靈妙なる大作用を有する大靈德にあらざれば、之を占むること能はざるは勿論であります。天來の君王統を萬世に垂れ賜ひ、所謂開闢以來君臣之分定矣。以臣爲君未之有也。天之日嗣立皇緒。底の神聖にあらざれば到底此俊德の宿るべき靈位ではないのであります。世の民王國を理想とするもの、則或は禪讓主義を以て其の元首を替へ、或は投票主義を以て其の主權者を定むるが如きは、其の理想の如何に關せず、統治者の資格としての最必要なる、第一義が皆無であります。神聖の意義が絶無であります。昔し帝堯が、其の位を讓らんとするに際し、德に求めて選擇大に懇めたるは、誠に以て萬代の龜鑑であります。天子の尊を以て、二女を匹夫の虞舜に下し、天下の爲に其德を試らるゝに至つては、實に以て言ふにいはれぬ仁君であります、さりながら帝堯は、二三代の後を御心配になりましたが、萬世のことを御觀察にはなりませずして、帝者は絶對なるべしとの大本義を立てられずして、有德不德の爭を遺すに至りましたるのは、僭越ながら、誠に以て遺憾とする處であります。此點より考へて見ますれば、我天祖大御神の、我御國體を掛め賜へる大御心の悠久にして崇高なることが、拜察し得らるゝのであります。これにても、我天祖の御靈德は、決して堯舜如き分際にあらざりしことが分るのであります。例令へば帝堯の德は、「下德不失德、是以無德」と云ふので、我天祖の御德は、「上德不德、是以有德」と云ふのであらせらるゝのである、凡そ何人に限らず、一人の大德ありと假定致しますれば、その大德に化育せられたる人々は、其の人を渴仰するの至情、自ら其子孫に傳はり、

どうか我々の主人をして、アノ若様を戴きたい、我々の子孫をして、アノ様な御高徳の御方の血統を奉戴させたいと云ふ、人情の起るのは自然の結果であります。そこで此至情が有徳者と他の人々との間に融合しその間に何等の異なりたる意味をも含まざる境界となりますれば、不知不識、我天祖の如き御詔勅となり、我國の如き御國體となるのは無論であります。然るに帝堯は、其の徳未だこの域に達しませぬので、所謂下徳は徳を失はずの分際でありますから、其の統治を受けたる國民も、帝堯の大徳の大融和作用を受けず、そのまゝ大徳として國民の腦裏に存して居るのみでありますから、終には彼の如き結果となりましたので、此點に關しては、誠に味のあることゝ私は信ずるのであります。

乍併、此處に一言するの必要ありと考へまするのは凡そ世の中に、治者被治者の關係が存在して居りまするのは、果して天理でありましようか、どうかと云ふ一點で御座いまするが、治める人と治められる人との關係は、畢竟優劣の關係で、一は之を命じ、一は之に服すると云ふに過ぎぬとすれば、或は甚だしき不合格ではなかろうか、何事によらず、平等に致しまするのは、平穏の狀態を得べき原因ではありますまいか。假令現實の有様としては、優勝劣敗の關係を繼續するにもせよ、これは一時の狀態で、畢竟平等となるべき途中ではなからうかと云ふ、疑問が御座りまするが、これは如何にも其の通りである。山は一刻々々に其の高さを減じつゝある。この道理より考ふれば、ツマリは平坦となるであらう。海は一日々々に淺くなりつゝある。この道理より考れば、この世界は凡て海となるにあらざれば、凡て陸となるであらう。陸は海よりも重のであるから、究極は、海となるであらう。さりながらこの作用もまた一時である。この間の消息は、風と波との關係でも分ると思ひまする。「大海風に因て波動するに、水相、風相、相捨離せず、而して水は動性に非ず、若風止滅すれば、動相即滅して、濕性壞れざるが如く、其の究竟に於きましては、古來の性質、固有

の性能は滅することはないのであります。則この固有の性能相働てまた一ツの結果を生ずるので、其の間には、又必相當の變化を伴ふのでありますが、凡そ本來の性能を以て相働き、各其の處を得るのが、平和と云ふには相違なからうと思ひます。鳶の飛で天に戻る魚の淵に躍る、皆これ其の處を得て、悠々自適する梅鹽で、これ等は皆平和の瑞祥と思はなければなりませぬ。之を要するに、五尺の小男もあり、六尺豊かの大兵もあります。三十歳に足らずして、頭の禿る人もあれば、六十になつても眞黒な人もあります。賢者あり愚あり、美人あり醜婦あり、凡そ森羅萬象一として平等なるものがありませぬ。同一の人が同一の筆をとり同一の紙に同一の墨を以て、同じ字を書きましても、千字が千字とも、全く同様には書けませぬ。假令外見が同じでも、其場所が違ひ、其經歷が違ひ、其濃淡が違ふと云ふ風に、どうしても全然同様のものは出來様筈がありませぬのに、獨り貧富貴賤に於て、甲乙の等差を絶つとするは、沒意義の甚きものであります。如茲惡說は既に今日のものではありませぬが、言葉の通手に言ひ及ぼした次第でありまするが、如何に平等觀を唱ふる同人間に於ても、それ〳〵隷屬する處ありて、秩序を維持するに相違ありませぬ。從て主領株もあり陣笠連もあるには相違ないのであります。さりながら如斯蠢々たる小差別は、絶對位に對しては悉く皆平等であります。大村兵部大輔の銅像と西鄕隆盛の銅像とどちらが高いかは存じませんが、淺草の十二階は確かに私共の家根よりは高い、田圃の枯蓼は、疑もなく山内の杉の木よりも低いが、富士山の高きより見れば、等く皆平等であります。淺草の十二階は、イクラ高くとも、海拔イクラと云ふことを以て比べて見ますれば九段坂の上にある此家よりも低いと云ふ觀念が、階行社に居る我々にも感ずるのでありまするが、富士の山嶺と參りましては、到抵御話になりません、富士山、新高山乃至葱嶺ヒマラヤ等の高山は如何にも高くはありますが、天の高さに對しましては殆んど路傍の土塊と選び處がありませぬ。されば平等差別の意義は、絶對

位に對しては、何等の交渉もなく、差別裡に平等あり。平等裡に差別ありとの實相は、絶對位の觀念を生ずると同時に、眼前に表はるゝのであります。則蠢々たる小差別を統合し、其儘差別の關係と存在せしめつゝ平等觀を維持するの妙境は、絶對位にあらざれば出來ない相談で、則ち煩惱と涅槃との融合が行はれて、必ずしも煩惱を絶たずして涅槃に入ると云ふが如き妙境に入る樣な鹽梅であらうと思はれますが、是等の妙味は、絶對者の主裁の下でなければ、到底出來ない相談で、不生不滅なる心性あり、嚴として主裁するにあらざれば、到底出來ないことゝ私は信じます。然るに國家がこの崇高なる意義を有せずして、強弱大小相爭たる結果として、人力を以て最高主裁者を作りたるものゝ如き、或は國民相議して其の元首を定めたる場合に於きましては、必竟差別觀を脱して平等觀に入ること能はざるは勿論、到底、今此三界は我有なり。其の中の衆生は、悉く是れ吾子なりと云ふが如き、鹽梅に出なり得ぬのであらうと考へます。元來父兄の神聖なるは、天來の意義を有するからであります、子の生るゝときには、父は既に教育して居らるゝ、弟の生るゝときには、兄は既に生れて居りますので、決して子弟が相協議して、父兄を推戴致した譯ではありませず、また各自競爭の結果、父兄となつたのでもありませぬ。去れば父兄は絶對的に父兄でありません。如何にするも父兄と子弟とは、平等ではありませぬ。如何にするも子弟を以て父兄とすることが出來ませぬ。則此天來の關係あればこそ、差別平等の意義が行はれ、一家の平和を安全に維持さるゝのでありますする。從て社會の差別的平等の意義も、平等的差別の眞理味も、絶對的の意義を賦有せられたる、國體にあらざれば、之を融合すること能はざるは、疑もなきことゝ私は信ずるのであります。こゝで申上るもなんだか少し變で御座りますが、社會平等主義とか、無政府主義とか云ふことを唱へて居りますする人々の如きも、是等の意義を知らぬからであらうと思はれます。平等主義は決して惡むべきものではないが、其の主義思想を無理に

も行はうと思ふて、過激なことをするから惡いのであります。假令過激の性質を帶ぶるは、其持前であるとは云へ、全體過激なことをする樣にさせるから惡いのであります。富者は富者、貧者は貧者として各其の分を守り、平和に愉快に相互に親睦して居れば、それで宜しいのであるが、自分は百萬長者であるから、貧乏ものなどは、イクラ輕蔑してもよいと云ふ風に壓迫するから、貧乏人の方でも、ダマツては居られぬので、アノ奴はけしからん奴だ、今に覺へて居ろと云ふて、終には過激なことをするのであります。ツマリ平等觀と融合せざる境遇にありて、壓迫に壓迫を加へらるゝから不都合な思想を生ずるのであるが、今も申上ました道理によりて考て見ますれば、我帝國は、平等觀を認容し得べき、世界中唯一の樂土であります。今日こそは、色々の障礙により、充分に行はれませんが、既に絶對を意義する君王を奉戴する以上は、たしかに行はれ得べき因緣を有する御國體であります。既往の歴史を見ましてもこの事を證據立ることが出來るであらうと思はれます。然るに、陰謀事件などを企つる人々は自分等の思想を根本義なる平等の意味を包容し、安全に保育せしめ得べき唯一の安宅に生れて居ながら、自分等の家も矢張隣り近處の普通の家と同樣に心得て、自分の家に寇すると云ふのは、何たる間違でありましようか、もしも萬一彼等の不了見の爲に、この家屋がつぶれて仕舞ふたならば、もう世界中に彼等の思想を寄すべき家はないのである。未來永劫自分等の思想を包容し得べき國家がないのである。此點より考れば、彼等は惡むべきよりも、寧ろ憐むべき人々である。どうか彼等が此の意味を承知し、彼等の主義思想の爲には、唯一無二なる靈山實土は、即これ我國を置て、之を他に求むること能はざるを信解し、熱心に御國體の萬々歳を三唱して、御所刑を受けさせ度ものであります。併しこゝにもう一つ考へなければならぬことは、國家と宗教との關係でありますが、この二つのものはどうして相融合して、平和の維持と道義の向上とをはからなければならぬのであるが、この問題の如きも、矢

張絶對の二字で解釋することが出來ると思ひます。

兎角神佛は、絶對の意義を有せられなければならぬと思ひまする。絶對ならざる神は、萬能の德を具備せられざるは勿論であります。佛魔兩立の觀念を以て、判斷致しまする神佛の眞正ならざるは勿論であります。佛魔兩立の神佛と、優勝劣敗の意義を有する主裁者と相融合すべき道理なきは、自然の結果であります。之に反し絶對の意味を備ふる神佛と、絶對の意義を有する王位とは、假令一は王法、一は教法の美ありとは云へ、正に相融合して一體となり、一如となり、其の間に何等の差別をも發見すると能はざるは勿論であります。元來世間には、これが善神である、あれは惡魔であると云ふが如き觀念がある。それは如何にもその通りでありますが、これ昔、小さな佛魔で、神聖の神佛の方便により出來上りたる、化佛の如きものであります。則世間に往來致しまする善人も惡人も皆これ神佛の作用によりて、出來上つたものに相違ありませぬ。人を殺すのも神の作用である。人を活すのも神の作用である。風の吹くも、濤の荒れるも皆神佛の作用であります。されば極惡非道の人と雖必竟神佛の命を受けたる役割の惡心役者に過きぬので、その人は決して惡むべきものでなく、誠に氣の毒な次第であります。提婆達多の役割も、必竟これに過ぎませぬので、法華經は、此の邊の意味をも解說して居られるものと信じまする。さりながら、世間の平和と人類の幸福とを維持せんが爲めには、如何樣にしても如此人達の少くなるのを望まなければなりませぬ。世間さへ既に寂光土となりますれば、惡魔を作る神佛の作用は直に御已になり各其の處を得、悠々自適するの極樂淨土となるでありましようが、各自勉强して、如斯世界に致しまするのが、吾々人類の目的であらうと考へまする。則この目的を貫かんが爲には、教法も出來、王法も出來ました譯であると私は信じまする。則王法教法は相待ち相佐け、進では國家の平和も維持し、幸福を進め、退ては人類の邪念を拂ひ、之を正道に導かなければなりませぬ。從て世界の平和を維持し、人類の道義を向上せしめんが爲には、世界的王法と、世界的教法と相並立せなければならぬので、則統一的王法と、統一的教法と相携へて進まなければならぬのは、自然の道理であると信じまする。然るに世界的王法は勿論、教法と雖未だ完全なる發達を見るに至りませぬ。或は佛と曰ひ或は耶蘇と曰ひ儒と曰ひ其他千差萬別、船載も啻ならざる多數の教法が御坐りまして、世界的眼孔を開て、人道を說くのでありまするが、未だ一として統一的教法と稱すべきものがありませずして、其の多くは超國家的なる半可通の言ひ現はしを以て、教法の高遠をてらひ其の實は超國家にあらずして、離國家なるを悟らざるもの多きは、抑もまた、如何なる原因によるのでありましようか、是れは疑もなく、相携進すべき王法なきの致す處に御坐りましては、この二法は必竟相提携せずには充分に其の作用を發起することが出來ませぬ、則言葉を換へて申しますれば、教法は王法の力を藉らざれば弘通することが出來ぬので、王法もまた教法の力を藉らざれば、充分に其の力を發揮することが出來ませぬので、ツマリは教法を信ずる國民が偉大なる勢力を發揮するにあらざれば、教法の布延は實際不可能であると、私は考へまする。亞些大王の偉業の如きも亦其一例に御坐りまする。さりながら教法と王法とは、其の存在の意義に於て、大なる相違がありませず。教法は教祖の教訓を遵奉し、造次顚沛心を離さずに居りさへすれば宜しいので、必ずしも時々刻々に人格として、表現せらるゝ現實の如來を拜するに及びませぬ。唯々教祖の教義を傳ふる先輩がありまして、心的に衆生を導接すれば、それで宜いのであります。されば之世界的王法なきに關せず、世界的思想則人類的觀念を以て、教義とする教法の存在を認むるのでありまする則教法は威力の作用を以て、現實に制裁を行ふものにあらずして、必竟心的作用に外ならぬのでありまするから、必ずしも人格的教王の存在を要せぬのでありまするが、王法は是れと異り常に現在の主裁者が必要であります。則現實の君王ありて元首となられ、德を布き化を行はるゝと同時に、不良の輩に制裁を加へつゝ

國家の安寧幸福を維持するの必要があります。

世間には世界的教義を有する宗教は、國家の存在と相容れぬなど唱ふる途方もなき謬見者もあると云ふ事で有ますが、彼等の說は世界的教法を容るべき世界的王法なしと速斷したる、狹き料見より割り出たる僻說であると、私は考へます。是等は必竟、各種の教義を研究しながらも、現在諸國の國體を研究せざるの致す處早計にも世界的教義と融和すべき、世界的轉輪聖王を認めざるの致す處であると、私は考へます。然るに此世界的轉輪聖王は、乍畏嚴として、我日本帝國に君臨遊ばされて、顯在し賜ふのであります。必しも痴人猶厚す夜塘の水にあらざるも、ツツポ計り探して足元を見んのでこう云ふ間違が起きるのであります。釋迦も達磨も些んな足元に居らるゝと云ふ話しでありますが、こんな學者は國と云へば歐米諸國より外知らぬ、文明と云へば、アッチのものゝ樣に考て足元を詮索せぬから、こう云ふ大ぬかりを致すのであります。我日本國に世界的轉輪聖王の御存在あらせらるゝと云ふ證據は、御國體を明めさへすれば自ら明瞭に相成まするが儒にまれ、佛にまれ、耶蘇にまれ凡そ如何なる教法を傳來するも、又如何なる主義の侵入し來る場合に於ても、必ずこれを融合せしめ、終には換骨奪胎して日本主義とならしむるは、全くこれが爲であります。是等の點に對しては、更に幾分の說明を要するのであります。

我國に發揮し、儒にあつては忠孝主義となり、佛にあつては、我唯一の國體的宗教たる日蓮宗も陶成するに至りましたるは、其の實主として王佛二法融和する機緣あるの致す處で御坐りまして、日蓮大聖人の仰られましたる、王法佛法に冥し、佛法王法に合すると云ふのも、全く是等の意義と私は考へます。

以上申述ましたる二三の點に就て、我御國體を拜想し奉る丈けにても、感激に堪へざる程愉快に感するのであります、先第一に、我國史上より考へて見まれば上世の記傳は、如何にも遼乎として稽ふべからざるものが多いので、我國に於ても、また他國の古代史と

同く、沒常識の記事を以て覆はれて居りまするので御坐りまするが、その中にも自ら一貫したる脉胳が御坐りますので、この脉胳が事實を構成する材料となり、動すべからざる實歷史として表顯し得らるゝことが多いのであります、殊に我皇國の上代史の如きは、今日迄研究致しましたる範圍内に於て、解釋し得られざる幾多の神秘的記傳を以て成立致して居りまするとは申ながら、多くは爭ひ難き事實を示しますので、就中一點の疑を挾むの餘地だも御坐りませぬのは、建國に關する明確なる史傳であります。

天祖御建國の大御心は、他の諸國の到底覗ひ知るべからざる如く、悠遠に、而かも雄大にあらせられます。則皇祖天照大御神より、皇孫瓊々杵尊に賜ひたる御神勅は。

葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾子孫の王たるべき地なり。宜く爾皇孫就て治らせ、行きくませ、寶祚の隆へまさんこと、當に天壤と究りなかるべし

（日本書記）

と日本書記に御坐りまする。この記傳は、古事記でも舊事記でも、御言葉こそ異なれ、其御意味は全く同樣で御坐りまする。則ち事記に於ては、

天照大御神、高木神之命を以て、問に便す。「汝之宇志波折流葦原中國者、我子之所知國。」と言依させ賜へり

（出雲傳勅）

日子番能邇々藝命に科せ詔はく、此豐葦原水穗國者汝將知國なりと、言依せ賜ふ。

（天孫天降）

人この事實は、舊事記には左の通り傳へて居りまする。

天神皇產靈尊、勅曰天照大神、詔曰葦原中國者、我子之可知國、詔寄賜。

（出雲傳勅）

天神太神、手持寶鏡、授天忍穗耳尊、而祝之曰、吾兒視此寶鏡、當尙視吾可與與同床共殿以爲齊鏡寶祚之隆當與天壤無窮矣云々。

（天孫降降）

又伊勢の皇太神宮に奉る祝詞には、

皇大御神の見霽しまする四方國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜り坐向伏す限り、清海原は掉拓干さす、舟の艦の至り留

る極み、大海に舟満ちつゝけて、陸より往く道は、荷の緒結び堅めて、磐根木根履さくみ、馬の爪の至り留る限り、長道間なく立つゝけて、狹き國は廣く、峻き國は平けく、遠き國は八十綱打掛て引寄る事の如く、皇大御神のよさしまつり賜へと云々

と云ふことが御坐りまするが、是に依て拜察し奉れば、御建國の大御心は自ら明瞭であります。

斯の如く高尚なる、而かも悠遠なる大御心、則ち「ワガ、ミコノ、シロサムクニ」と仰られたるが如き大自覺と、大精神を以て、我日本國を賜へるのみならず、「狹き國は廣く、峻き國は平けく、遠き國は、八十綱打掛けて引寄る事の如し」と仰せられて、御皇謨の雄大無限なるを示されたるが如きは、誠に以て感激の至りに堪へぬのであります。殊更に「所知」の御勅語は實に萬代までの御洪範であらせられます。この御洪範は、實に我御皇統の萬代不易なるを證するのみならず世界を精神的に御統一遊ばさるべき御美德の、御表顯にあらせらるゝと私は信じまする。更に言葉を進めて申しますれば、征服討伐は神國御建立の御精神にあらせられずして、皇業の御淵源は、天祖以來列聖の御明鏡を以て、天下の黎民を知らしめさんとせらるゝにあるので、所謂形影相顧ると云ふが如き鹽梅に天が下に御治平遊ばさるゝのでありまする即虛を致す事こゝに極れり靜を守ると之篤く肅然と紛芸の其根にかかるを見ると云ふ御樣子にあらせらるゝのでありまず之が則ち天長地久にして萬法並び作り、蕭然として而かも包容せられざるなく、我日本國民の思想界に最大の貢獻ありたる、儒佛兩教の如きも、我國史に於て見るが如き變遷をなしたる所以であると私は信じまする。

兎に角、御皇業の大本は、皇祖大御神の御明鏡を以て、天下の黎民を知しめさるゝに在りとの大精神と、大自覺とを以て、建國の基礎となされ、天來の大統を垂れて、之を無究に傳へたまへるが如きは、世界各國に其例なき處であります。此御建國の大御心は無上宏遠なる御聖謨となり、更に此幽玄無上なる大御心を、三種の神器に含ませられ、之を天孫の尊に、御傳へに

相成り、御靈德を積まるゝには、神璽の如く、政道を行はるゝには、神鏡の如くまつろはぬもの共を征し賜ふには、神劍の如なさせ給ふべく、御教訓遊ばされたのであります。この難有き大御心は、御國實を拜想し奉ると同時に、彷彿として來儀あらせられ、我々臣民をして、不知不識渴仰の涙に暮れさせ賜ふのであります。

前にも申上ましたる通り、「所知」と仰られたる神勅は、これを「汝之宇志波祈流葦原中國」に對照致しますれば、一種崇高なる靈氣を感ずるが如く覺ゆるのであります。原來「所知」とは、鏡の如くあらせらるゝの意味に御坐りまするので、(これは、私共の御說明申上べきことには御坐りませぬが、先自分の思ひますることを、そのまゝに述べて見まれば) 先鏡の如き御德を備へさせらるゝべき意味合と拜察し奉るのでありまするが、凡そ何人に限らず、明鏡に對しますれば、不知不識容儀を正さゝるを得ざることに相成まする。例へば鼻邊に墨痕が附て居りますると致しますれば、如何にするも、拭ひ取らずには居られませんので、幾度か鏡に對して拭ひ清め、然る後初めて心を安じて仕事にとりかゝることが出來るので御坐りまする。我がすべら大君の御德も猶この明鏡のごとく、明に百機を照覽あらせらるべき大德を備へられ、文武百官以下臣民は、この難有き御明鏡に對し奉り、各其つかさ〳〵に從ひ心を清めて御奉公申上るのでありまするので、元來鏡の德は、如何なるものにても反影すべき性質を具備すると同時に、例令如何なるものが映じましても、これが爲少しも汚さるゝことはありませぬ、從て森羅萬象來るがまゝに映せられて、毫も凝滯がないのであります。この明鏡の有樣が、自ら御國體に含められ、不知不識國民の精神に傳はり、我國特有の大融和作用が行はるゝことになつたのであらうと、私は信じまする。

併し、この所知といふことに就ては、私の友人間にも、異說が御坐りまする。其の言ふ處によれば、「知ろしめす」といふことは、「御存知」と云ふことで、其の意味は、東京府知事の知も同樣で、たゞ單に治むると云

ふ意味合に過ぎぬ。決して、君の樣な深い意味を以て居るのではないと云ふことであります。これは如何にも尤な話でありますが、要するに「しろす」と申しても、「うしはく」と申しても、國を治めることに相違ないのでありまするが、其の委の上に於ては、霄壤の差が御坐りまする。則萬機を御照覽あらせらるゝと云ふ意味と、何もかも積極的に御差圖なされ、無理にも御意見を御實行遊ばさるゝと云ふのとは、大分の相違があります。「うしはく」は、頭目とか、統領とか云ふ意味でありまするので、如何にも强行の意味が御坐りまするが、「知ろしめす」に至ては、八面玲瓏鏡の如き鹽梅に見ゆるのであります。また友人間には、君の國體觀は、如何にもよいが、必竟無意味のことを有意味にして、もつたいを附ける氣味はありはせぬか、「むりばい〳〵」は、「むりばい〳〵」でよいので、そんな六ケ敷說明も效能書もいらないと思ふ。二千年も三千年も昔しに、君の云ふ樣な深遠な意味を以て、敎を垂れられたと云ふのは、如何にも妙であると云ふことであります。この「むりばい〳〵」と云ふは、御承知かも知れませんが、「カナカ」人種の野蠻人が、御臂を振りながら、たゝいて踊るのでありますので、つまりあんな野蠻人のことを、解釋するにそんなにもつたいぶつたことはいらない、決してそんなつもりで敎を垂れられたのではなからうと云ふ意味であります。この議論なども、聯かに一面の眞理を含んで居りまするのであります。凡そ物事は、そんな簡單でもなく、またそう輕蔑したものでもありませぬで、「むりばい〳〵」の踊りなども中々馬鹿やそつとのものではありませぬでこれでも色々の意味と、色々のシナと、それから色々の練磨を要するのであります、古の訓戒は、其の時代にはありのまゝを、そのまゝに述べられたので、別に深い意味がなかつたかも知れませんが、よく玩味して見ますると、幽玄微妙の意義あるを發見することが多のであります。君臣の臣の字の古字が惡で、忠を以て一人を戴くと云ふ意義を有するなどは、中々に輕蔑が出來ません。孝行の孝の字は、子供が老人を負ふので

老の字の略字の下に、子の字を書たと云ふ話でありますが、こう簡單なる言ひ顯より、今日の如き微妙なる意義を生じ、古にあつては孝經となり、數百千の碩學の註釋となり、今日にあつては澤柳博士の千何百頁と云ふ大冊の說が出來るようになつたのでありますが、これを「むりばい〳〵」流に解釋して、孝は親を負ふことであるからと云ふて、朝から晩まで父母を負ひまはつて、これより以上の孝はないと云ふことではいけませぬ。どこまでも孝道の眞義を開拓して立派なものに仕揚なければならぬのでありますが、これと同時に古代に於ても、凡そ今日の如き意味を含んで居たと云ふことは察せらるゝのであります。要するに大聖釋迦でも、堯舜でも、人格以上の意義を有せぬと考へて、赤裸々たる肉身のみを考て見ますれば、矢張一種の「むりばい〳〵」時代に御生れになつたかも知りませんが後世に垂れ賜へる訓戒は、片言隻語と雖、千萬無量の意義をこめられて居らるゝのであります。況して、皇祖大御神の御神勅は、整然として其形式を備へて居らるゝのである。而かも、皇祚の隆い、天壤と極なかるべしと迄御豫言されたのであります。もしあんな時代にそんなこみ入た御考があらせらるべき筈がない、子孫の長久を祝福するはあたりまへだ、どうしてもこれは偶合と云ふものだと云ふかも知ませぬが、もし果して然りとせば、凡そ儒佛の經典の如き甚深幽妙なるものは、悉く後世の僞作とせなければならぬのであります るが、兎に角千年二千年以前の偉人は、矢張今日の偉人位の見識があつたと云ふは、明瞭なことであります千年に一人と云ふ如き大偉人が、今日のへボ偉人よりも大なるは勿論であります。コセ〳〵したつまらんことは、どうか知りませんが、全體に於て優るとも劣らざる見識を持て居られたに相違ないのであります。世の中の人は、世の中の事を、進步した〳〵と云ひまするが、それは枝葉のことで、根本義に於ては、左程の進步を見ないのであります。今日の小學生徒は、電車や活動寫眞を知て居るからと云ふて、中江藤樹先生や伊藤仁齋先生よりも偉いとは云はれませぬ。今日の兵

學者は、千人も萬人もウヨ〳〵して居られるので、たまには非常に偉ひ方も御出になりまするが、矢張孫子以上の兵書を見ることが出來ないのであります。今日の小學生徒の如き、我々分際が二千年三千年以前の大聖人の御言葉が、餘りにえらいからそんな意味ではなからうと思ふなどは、僭越の極である。大聖人の御言葉は、一言一語精細に玩味し、無上幽玄なる意味を以て盈されて居ると解釋せなければなりませぬ。又此意味より解釋致しますれば、「所知」の二字は、如何にするも右申述べましたる通りの意味合で、大御神の御聖謨は、決してこれに外ならずと信せなければなりませぬ。申すも畏れ入りたることには御坐りまするが、前に述べたる如き大精神を以て起り、右の如き大聖謨を傳へまつれる「皇御國」に生を受けたる我々同胞臣民は果して何等の幸福と稱すべきで御坐りましようか、我新領土たる朝鮮は、申す迄もなく支那の如き舊國すらも、其の實際の歴史に於ても、一として我帝國に類する建國の精神を認めることが出來ませぬ。「我御子の知さん國」と仰られたるの御神勅の如きは、天威赫灼として、天日を見るが如くに御坐りまするが、如斯き雄大なる御言葉を拜するが如きは、他國の夢にだも見るあたはざるところであります。支那の如き所謂三代の隆時に於ても、此の大精神はすこしも發揮して居りませぬ。「克く俊德を明にし、九族を親んず、九族既に睦して百姓を平章にす。百姓眼明にして萬邦を協和す。」と云ふ位のもので、殊に所謂俊德は前に述べましたる通り下德は德を失はずの德に過ぎぬのであります。湯誓の如きは、其の名を正さんが爲め、先帝の無道を議りながら、力を以て征服の業を成したる事實の證明とも申すべきものに御坐りまして、「臺小子、敢て亂を稱くるを行ふにあらず、有夏罪多し、天命じて之を殛せしむ。」などゝ云ふて居りまする「爾願くは、予一人を輔け、天の罰を致せ。予其れ大に汝に賚はれ、爾信せざるなかれ。朕言を食まず爾誓に從はずんば、則汝を孥戮せん。赦す攸有ることなけれ。」に至ては、魏のまた魏とも申すべき次第で、簒奪の經

跡歴々明瞭であります。民に食ましむるに利を以てして、相共に其の君を弑し、決して虚言をいはぬと誓ひながら、尙民の自分に從はざらんことを懼るゝが如きは、些の神聖だも認むることが出來ませぬ。もし自分と共に誓はないと云ふならば、汝一人に限らず、汝の妻子をも誅戮して仇をとつてやると明言するが如きは殆んど極端であります。其の他當時のことは誠に以て醜穢見るに忍びざるものが多いので、私は我れの先輩たる漢學先生達は、何故に書經の樣なきたない本を、尊敬したかと思ふて怪む位であります。其内に色々よい事はあるに相違ないのでありますが、古人言あり、我を横すれば則恨　我を虐すれば則ち讐」などに至ては、言語道斷理想の低くして、庸劣なるは勿論利己主義を根本とする商人根性を表示する處、誠に氣の毒に考られるのであります。要するに支那には、堂々たる建國の精神とも稱すべきものはありませずして、たゞたゞ帝堯の範に倣ひ、「有德作王」の主義を基礎とする計りであります、「御聰明なるは元后と作る」と云ふて、其の主義を明示して居りまする。天下民を佑け之が君を作し之が師を作す。」の語は、明かに民主主義を表示して疑ふべき點が御坐りませぬので、支那の元首些の神聖の意義をも認めることが出來ませぬ。民主主義と有德作王主義との融合は、德を重する場合に於てのみ行はるべきものに御坐りまするので、末世に至り强弱相爭ふて、國家を私有するに至るべきは、理勢の當然であります。有德不德相代るも强弱相代ると意味に於て同一であります。最高最美は絶對にあらざれば、到底得らるべきものにあらざるは勿論、絶對の意義を有するものにあらざれば、大平和を維持して永く鴻業を垂るゝこと能はざるは無論であります。此點より考て見まするも如何に我天祖大御神の大御心の、無上崇嚴にして、雄大なるやを拜察し奉ることが出來まする。畏くも我御皇統は、究竟位にあらせられ、有史以來絶對的に絶對なる事實を示されつゝあらせらるるのであります。支那傳來の儒教は其の根本主義に於て有德作王主義で御坐りまするが、一たび我皇國に入りましては、絶對を意義する、我御建國の大精神に寸毫の影響をだも及ぼし難く、忽ちにして日本化し去られ、純然たる忠孝主義となつたのであります。（未完）

日蓮上人畢生の主張

（三月十六日統一會堂に於ける日蓮上人降誕會の講演也）

大僧正　本多日生師

本日は日蓮上人の降誕會でありますが、此趣意に就ては前來吉田氏と松本氏とに依つて詳しく述べられたことでありますから、最早や繰返して申しませぬ、松本氏は丁度御馳走の中の漬物見たやうなものであると云ふことでありましたが、大部其漬物が澤山あるので大根の漬物もあれば京菜の漬物もある、奈良漬もあれば新漬もあると云ふやうな事で、色々漬物が五品も八品も出たやうな譯で、漬物の爲に他の御馳走が壓倒された譯でありまして、或御經の中には、教を聞く場合に一時に多くの教を聞へば、譬へば器の中に水が一パイになつて居る時には、其れ以上を入れられぬと同樣にどう云ふ善き教でも是を受けることが出來ないと云ふことがあります、今までに多くの時間で既に諸君の精神の上に一パイに溢れる程に詰め込まれて居る、只今の場合には私が此上へ注ごうとすれば、溢れる計りで少しも這入らないのは當然と思ひますが、併し人の精神は妙な作用を持つて居るものでありまして、丁度御茶を茶筒の中に入れて一パイになりました時分に横の方を叩くと云ふと、大部上の方が際いて來るものであります、そこで今私の御話をする前に、一つ貴方がたの心の横を叩いて上の方を際して貰ひたいと思ふのであります、それを際すには相當の時間の休憩を取つて此屋外にでも出て散歩の少しもしますと云ふと、直ぐ上の方が際きますけれども、さう云ふ時間もないのでありますからして、特別の方法を以て此精神を際して戴きたいと思ふのであります、斯樣な無意味な話をして居るのも、即ち諸君の精神を他力的に際す方法と思つてして居るのであります。

昔の格言に人にして道なくんば魚の水を失へるが如く、水を得れば生き、水を失へば死すと云ふ言葉があります、魚が水を放れたならば死ぬると云ふことは誰にも分ることでありますが、人が道を離れたならば死

ぬると云ふことは、分らない人が多くありはせぬかと思ふのであります、道を離れても飯を食て居り肉を食つて居るならば人間は生きて居るではないかなどと、斯の如き考への人が多いやうにも思はれますが、それは米を食つて生き水を飲んで生きて居ると云ふは、本統の人間として生きて居るのではない、生物として動物として存して行くと云ふのである、人間が人間らしい活方をして居ると云ふことは、道に依つて生きるより外活方はないのであります、此意味合を一つ考へなければならぬ、之が解らなければ日蓮上人が我國に御生れなされて難有いと云ふやうなことは感ずることが出來ぬ、日蓮上人は米又は肉やパンを呉れないけれども、此世人の食物として道を與へて呉れた恩人である。

又古い語に衆疑へば國を治むるなく、衆惑へば民を安んずるなし、疑ひ去り惑ひ還らば國乃ち安かるべしと云ふ格言があります、中々六ケ敷やうでありますが分り易く申しますれば、大勢の人々が疑の心を以て此の世の中に生きて居るならば、其國を治むることが出來ない、大多數の人が惑ひの心を以つて漂浪いて居るならば、其民をして安んぜしむることが出來ない、國を治むるには人々の心の疑ひと惑ひとを取つて仕舞つて此の人間の精神に安心立命と云ふ立派な目的を與へ信仰を與へ、進むべき方向を示さなければならぬ、例へて見たならば、貴方方を默つて門の外に連れ出したならば、何方へ行くのか分らぬ、家へ歸るのであらうか、上野の山へ行くのであらうか、電車に轢かれて死ぬのであらうか、方向と云ふものが定らなければ其人は進むことは出來ぬ、諸君は閉會になれば歸るべき方向が定まつて居るからして、それ〳〵歸ることが出來るのである、然るに今日の日本の國民は如何なる有樣であるかと云ふと、表面は落付いて居るやうであるけれども、其精神の内面に這入つて能く〳〵吟味して見ると云ふと、何處にも疑ひの心が起つて居るのである、之は色々の方面から起つて居る、道を尊んで生きると云ふやうなことは古い量見ではあるまいか、金を大切にして唯此世の樂みを求める方が氣の利いた事ではあ

るまいか、表面には國と云ふことを言ふけれども、中々そう計りは行かない、自分の子のことも考へなければならぬ、或は眞理と言ふものは東西の別のあるべきものでない、日本に發明せられたる眞理も、西洋の眞理も一つである、御日樣は日本も照すが西洋も照らす御日樣は日本の御日樣と云ふやうな客觀量見は行かないと云ふやうなことを聞き嚙つて、思想界は混亂に混亂を重ね、疑に疑を重ねて其適從する所を知らない斯う云ふことになつて居るのである、よし定めて居つてもそれは間に合せに定めて置くので、先づ漂浪たへて居ながら商賣を勉强しやう、宗教の信仰が大事であるか否かは分らぬけれども、宗教も信ずると云ふ風に確信を持たない國民である。

さう云ふ場合には如何にしても、充全に國家を發展せしめることも、健全に國民を安心さすことも出來ない今日の憂を除かんとするならば、人々の心に進むべき方向を與へ、チャント太陽の光を拜して人間世界が明らかになるが如くに、行先の目的を明かにして進んで行かねばならぬ、人々の心の光を與へなければならぬと思ふのである、此點から考へまするとと日本には偉人も澤山現はれて居りますけれども、特に日蓮上人を以て我々國民が大偉人として思想界の日月として仰いでよからうと思ふ、人間は夜が明けても御日樣の光りを見られぬ、何日經つても御日樣の光を見られないと云ふ暗黑であつたならば、非常な苦みを感ずるのであります、哲學を繙いて見ても、倫理道德で見ても、行先が明瞭して居ない、何所へ行つて見ても我々の思想の欲求を明白に指示されないと云ふ場合に、獨り日蓮上人の敎によれば安心立命を取ることが出來るのは最も幸福な事である、如何に智力の深い人でも、又愚な人でも、悉く健全なる信仰を定められるものであると云ふて慰藉せられたならば、日蓮上人は我々の尊ぶべき御方であると云ふことが知れやうと思ふのである、茲に私が上人の德行を賞讃するのみでは、自分の宗旨であるからして賞めると云ふやうな感を持つ人がないとも言へない、賞める私の心は公明正大であつても、

聞く人が捨れたる量見を以て居る人が澤山ある、淨土宗に行つて見れば淨土宗のことを賞める、法華宗に行つて見れば法華宗のことを賞めるが當り前だと斯う思ふのであらう、さう云ふ意味から私が言ふのではない其證據の爲に今日蓮上人に對する世間の敬讃の聲、讃嘆の叫びを少し御話しゝやうと思ふのであります。

是は近代非常の廣い方面から起つて來て居る、先づ第一に現はれて居りますのは、上人の事を小國民則ち小學校の生徒の思想に向つて紹介しなければならぬと云ふ着眼である、小學校の生徒には無論日蓮上人のことを知らして置かなければならぬ、宗旨や學問の如何に拘はらず、日本の將來の國民となるべき子供には日蓮上人の偉大なる人格を知らして置かなければならぬと云ふことで、上人の意思の鞏固であつて、どう云ふ難義なことが現はれても屈せず倦まずやられた所の、其の强い意思や勇氣をば國民に知らせなければならぬと云ふ考へで上人の爲に筆を執つたのが、有名な國文學者大和田建樹氏の「日蓮上人」と題した本である、それから近頃大分に氣燄を擧げて熱烈に上人を鼓吹して居るのは三宅雄二郎氏である、是等の人は其鞏固なる意思を國民に知らせなければならぬと云ふのである、また內村鑑三と云ふクリスチャンの人がありますが、其人が警世雜著と題する本の中に日蓮上人を賞讃して居られる、是は亦非常の讃め方で日本人は澤山あるが眞の日本人は日蓮一人である、恰も鶴が烏の仲間へ現はれたも同じである、見よ比叡山に行つて學問修行の時に其議論に於て當時肩を並べた人が獨もなかつた、又熱心に宗教の事で祈られた時に血を吐くに到つた、物事に熱心と云ふことは多いけれども血を吐く迄に至ると云ふことはないことである、政治に熱心して血を吐いた人が何所にある、學問に熱心して血を吐くものは何所にある、男女の戀と云ふものは最も熱情を高めるものであるけれども、女が男に對して血を吐くまでの熱を以て居るものは殆んどあるまい、男で女に對して血を吐くまでの熱を以て居るものはあるまい、まして學問技藝の爲に血を吐いたものは獨りもあるまい、

何所の世間何所の世界の歴史の中でも其例を見ない、其例を求むれば唯一人得ることが出來るであらうと云ふことからして、日蓮上人の熱誠の溢るゝことに就て又考への大きな點に就て日蓮に及ぶものはあるまい、日蓮の如き大偉人は國民進路の指導者である。

上人が建長五年四月二十八日、旭に向つて南無妙法蓮華經の題目を唱へられた時、是を開宗式と申しますが、此時は御日樣が大海からして水平線上に黄金の光を上げらるゝ曉方時であつて誰れも居らぬ、能く世間には己れの量見は斯んなものだが、御前も賛成して呉れぬかと云ふやうな小さな量見な人がある、然るに日蓮上人が足下に洋々たる大海を跳め、南無妙法蓮華經を唱へて此自分の主義は御日樣の光が東より西を照す如く世界を照すものであると云ふ確信を示した、上人が人の前に法を說く時は決して賛成を求めるのではない、汝等を敎ゆるが爲に、日蓮は法を說いて居るのである、斯う云ふ意味に於て日蓮上人の抱負の深且つ大なることは、是亦他に類例を見ないものであると云ふことを賞讃して居る、其外日蓮の特殊の色彩を發揮することに於ては、此内村と云ふ人は實に上人を激賞して居るのであります、それから次には博士高山林次郎氏でありますが、是は博文館の太陽若しくは全國の青年に普及して居る中學世界と云ふ雜誌がありましたが、そう云ふ雜誌の上に日蓮の偉大なることを紹介した、秀吉が腹袋が大きいの誰れが大きいのと云ふけれども日蓮上人はもつと大きな智慧と、もつと大きな德があつて飛び超へたものである、日本の三千年の歴史の偉人には日蓮に肩を並ぶるものが獨りもない、上人が此日本に生れて下すつたと云ふことは、日本人の總ての肩が廣くなる、總てのものが顔が宜くなるので、日蓮を有する國家は光榮である、日蓮を有する國民は誇りであると云ふことを言ふて賞讃したのである、併し高山博士は日蓮の主義に就ては少し副はざる點もあつたそうして此觀念に對しては少し行過ぎたやうな御說もあつたやうでありますけれども、高山氏は未だ研究中でありましたので、惜しい哉中途で死なれた、其次は

有名な兒童心理學の大家高島平三郎君であります、是は心理學の上から論を立てられたので、發生心理學上より見たる日蓮上人と題して論じられて居る、人間は智慧も發達させなければならぬ、情も發達させなければならぬ、意思も發達させなければならぬ、併し順序宜く各方面が伴ふてズット發達した人と云ふものは滅ないものである、秀吉があれだけの人であるからと云ふて、他の思想界から見ると極く幼稚な點かある、清正でも或方面から言ふと缺ける所が出來て居る、どう云ふ人でも智情意の三面が圓く整ふて子供の時分から間斷なく順序宜く、發達をしていつたと云ふものは日蓮に及ぶものはない、發生心理學上の好模範であると云ふことを以て日蓮上人を紹介せられたのである、又海軍大學の敎官たる佐藤海軍大佐は國防史論の上に於て日本の國を本統にもり立てゝ泰山の安きに置くと云ふのは、日蓮上人が法華經主義を以て解釋して居る國家觀でなければならぬと云ふことを主張せられ、そうして海軍大學校に於て講演せられて之れが帝國國防史論と云ふ上下二卷の約千頁程の本になつて出版されて居る、國防史論の中には是が封建時代ならば何宗旨でも宜いけれども王政維新の今日、上下齊しく天皇陛下を戴いて居る時代に於ては、思想界に於ても日蓮上人の法華經の統一主義を奉じなければならぬ、其他の宗旨は御日樣に對する星の光り見たいなものであると云ふことを書いてある、それから更らに小笠原海軍大佐は日蓮上人の國家觀と云ふことに就て研究をせられて確實牢乎たる日本の國家主義を立てるには日蓮上人の主義に依つて研究をしなければならぬといふて居る、そうして高山博士あたりの少し行過ぎたやうなことも訂正し、又有り觸れた日本の敎育家が持つて居つた所の、淺薄な極く薄篭な國家主義でなく、法華經や日蓮上人の敎に基きたる根底ある深き意味から見た所の國家主義を主張し、日蓮主義と國家主義との結合に於て國威を光揚することが是が眞の安國なりと云ふことをあらゆる方面に於て發揮されて居る、其外姉崎博士は宗敎學上の研究よりして法華經の宏大なる敎へである

と云ふことを認めた、從つて日蓮上人の主義を各方面から研究せられ、高等なる宗教として又其精華として日蓮主義を研鑽し、大に上人を渇望せられて居るのである、未だ此外澤山ある。

其う云ふやうな工合で、國家の方面からも來れば、或は心理學の方面からも來れば、或は道德上の研究からも來る、更に文學上の方面からして日蓮上人を論じて居るのもある、今日では日蓮上人を渇望しない人は話せない人と云ふ有樣で、日蓮上人を唯惡い坊さんのやうに言つて居る人は物知らずである馬鹿であると言はれても、其矢面に立つて反對するやうな人は當今見當らぬやうになつた。

以上は即ち世間の公平なる着眼から見た日蓮上人であります、是等は何れもそれ〴〵の光を放つた御說でありますが、更らに宗門內から專門的に見た所の日蓮上人の深遠卓越なる點は其外に殘つて居るので、此味はチョット解り兼ねるやうな實に尊い所がある、專門のものには澁いやうな所に特別な旨味があるので此の味を能く按排しなければならぬ、初めの內は解りの宜い所が宜いが、段々進んで行くと澁味の所が宜いようになる、娘の時にはパットした樣な色取が宜いが段々歲を經つて來ると云ふと地味なものが宜いので日蓮上人に對する觀察も花やかなピカ〳〵光るやうな工合の所を觀て、それが面白いと云ふことを言つて居るが、それだけでは眞の日蓮上人の全體の價値と云ふものを認めることが出來ない、日蓮上人には何人の言葉を以ても賞め切れない點がある、唯涙を流して南無日蓮上人と云ふことより外一言も發し得られない特殊の光を有つた處がある、是は何んであるかと云へば、先に申した處の道の人である、總ての人の疑を解く所の光である。

それに就いて先づ私の題を一言しなければならなぬ、それは日蓮上人畢生の主張と云ふ偉ひ題を出したのであります、今まで申したことは畢生の主張と云ふことゝは關係が少ないのでありますが、爰に簡單に畢生の主張と云ふことを申し上げやうと思ふのである、そ

れはどう云ふ言ひ現し方をしたら宜いか困るのでありますが、御經の方から云ふと、一乘の敎を立てられたと云ふ事であります、法華經の神力品には畢竟住一乘とあります、此一乘の敎を立てると云ふことは、外に何人も眞似ることが出來ない點である、何と云ふ言葉を以てしても足りない處のものは、此一乘の言葉に依つて上人が建設せられた所の敎である、此一乘の敎と云ふ意味を御話すると長くなりますが、色々な敎とか道とかいふことに就て總て統一して來る所の敎である、人が生きて働いて居る、此現實と理想といふことから言ひますれば、此二個を一に調和して仕舞ふ所の敎である、國家と云ふ事と宗敎と云ふ事を是を適當に調和する所の敎である、道德と宗敎と云ふこともあるが、此の道德と宗敎とを能く調和して行く所の敎である、國家と世界と云ふものを適宜に融合する敎である實に此敎は何とも言ぬ所の妙法である、一乘の敎は之を一方から言へば妙法である、何とも言へぬ所の有難いものである、即ち南無妙法蓮華經といふのである、是は學者にも解らぬ所のものである、學者が理屈一點張の頭で何ういふもの期うういふものと、淺薄な解釋をして了へば甘味が無くなる、それでは旨い所の味を吸つて仕舞つた粕見たいなものである、母親が蠶豆を喰つてズット旨い味を吸つて仕舞つて粕を子供にやつたならば、實に可愛想なものである、噛んで見て旨いものであるが、其旨いものを吸つて仕舞つて粕だけを人に喰はしたのは駄目である、宗敎はこういふものでない、其所は世の學問などとは大に違ふ、學問の方では如何に議論をしたつて有難味といふものはない、宗敎の方は解らぬやうであるけれども段々忘るべからざる程の味を知るのである、それで世の中の人は世間のことゝ出世間のことゝ云ふ風に區別して、先づ是は世間の敎であるからと云ふて道德を立てる、宗敎は唯だ死んだ先のことを敎へるとか、或は何々を信ずれば御利益があると云ふことを敎へるとかいふて居る、道德は死んだ先の事はどうでもよい極く間に合せのことでよいと云ふて、普通宗敎に言ふような未來とか生死の

問題とかいふものは、丸で夢幻に等しきものと思つて居るものが多い、そうして頻りに道德を云々して宗教を笑つて居る、これは丁度烏が鶴を笑ふと同じやうなもので、宗教が未來に偏したり單に御利益的の淺き信仰に陷つたり、又道德が現世の行爲のみを支配するものとして宗教の信仰を笑ふが如きは是れ共に甚しき迷見である、之を打破るのは日蓮上人の教である、元來人間の精神は二つあるものじやない、是は道德是は宗教の精神と云ふ風に二つあるものでない、道德は生きて居る間の仕事である宗教は未來に屬すると云ふて二つの尺度を拵へてやれるものでない、書はいくら惡いことをしてもよい、もう大部金を儲けたから夕方になつて神樣に御燈明を上げて、片手で拜んで片手で家の尻をつねると云ふやうなことをして、宗教の方へ來て罪障消滅を云ふた所が許さない、そこで宗教はどうしても實地の生活と一致せしめて行くべきものである、唯親の死んだ日に宗教を信仰するとか病氣に罹つた時に信ずると云ふのではない、即ち我々が唱ふる南無妙法蓮華經と云ふものは、何をして居つても何所にでも這入りて行かねばならぬ、それが總てのもの、光りとなり方針となつて居なければならぬものがある、丁度人の心が一の至誠即ち誠と云ふものを元として、君に事へては忠となり親に事へては孝となり人に向ては博愛となる、唯其爲す所のものに依つて違ふのみである、娘が家に居れば孝養である、家に行けば貞操である、子を產めば慈愛となる、一の誠が、親に對し夫に對し子に對し向ふ所によりて孝と言はれ貞と言はれ愛と言はれるものである、其心が一でなければならぬ現在の教も未來の教も一に歸すべきである、日蓮上人の主義は一切を包括したる一乘の主義である、それを身を以て實行せられたのが日蓮上人である、唯だ文字で一乘の教を書いたのでなくして、それを自身の身を以て行ふたのである、日蓮上人は親に對しては大孝行の人となつた、君に對しては大忠節の人となつた、國に對しては模範的愛國家となつた、又教に對しては一レ程の信仰家となつた、實に日蓮其人が一乘の教の模

範である、宗教から見るも歷史から見るも何所から見るも模範であると云ふのは、身を以て一乘の主義を行つたからして偉大なる人格を顯はしたのである、此人格を小さくして了ふて危險けの御祖師樣毒消の御祖師樣と云ふ風にしては行かぬ、日蓮上人が合掌して立つたからには人を救ひ國を救ひ廣くは世界を救ひ、もう一つ廣くすれば十方世界の一切衆生を救ふ所の偉人で總ての善い事が皆一身に集つて顯はれて居る、此味を一つ考へなければならぬ、之を能く理解すれば國家主義と個人主義をどう仕樣と云ふて間誤付かぬでもよい日蓮上人の所へ行けば皆一時に解決がつくのである唯愛に言はなければならぬのは、無論國家と云ふものは人類の發達上大切に相違なく、又同時に國家に依つて國民は安寧幸福を維持せらるべきものであり、又國家に依つて世界の文明を進むべきものであります、されば國家は內には國民の福祉を增進し、外には世界文明を發揮すると云ふ責任を負ふて立つて居るに相違ない國と云ふものは個人々々をば安らかにして行く處のものである、共に、世界に向つては世界の文明を援けて行く處のものでなければならぬ、若し國內に於ては國民の幸福を賊し、外に於ては世界の文明を破壞すると云ふものであつたならば、斯かる國家と云ふものは不都合極まるものである、それだから國といふものは、個人の福利を保證すると共に世界の福利をも進めるものである、之を爲すには大なる教へ大なる道に依らねばならぬ、日蓮上人は人々を憐れみ賜ふこと母の赤子の口に乳を入れんとはげむが如く、又貧しい者でも病める人でも總て之を救ふてやりたい、一切衆生の苦みを受くるは日蓮一人の苦みなりと思ふて居られた、獨りのお婆さんが來ても、よう御參りなさつたと云ふて一人を助けるにも全力を注がれる、獅子は兎を捕るにも全力を入れる虎を押へるにも全力を致す、一人のお婆さんの爲にも雄大なる國家の爲にも同樣に力を致される、南無妙法蓮華經と云ふものは獨りに與へる時分に少さくて國家に與へた時分に大きいと云ふものじやない、皆同じことである、日蓮上人が一人を憐れむにも

慈悲の涙を湛へて居る、世界の爲にも大慈愛の心を注いで居る、されど國家を中心として日は東より西を照す如くに此教と國とが合して全世界の光明とならなければならぬ、と言つて居らるゝ位で、決して外の國の人はどうでも宜いと云ふことを言つて居られない、されど此人を救ふ爲めに國を忘れない、世界を思ふために國を忘れない、宗教の陷り易き弊害は人を憐れむに傾いて國家と云ふ觀念が薄くなる、然るに日蓮上人はこの點に特色がある、即ち我れ日本の柱とならん我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならんと誓はれた、是が日蓮上人畢生の主張である、此日本を世界の中心として有道の國家たらしめ、光明を世界に與ふる國家たらしむべき誓ひである、又他面には人々を肉體の上からして安らかにするのみならず精神の上にまで安心立命を與へる國家たらしめやうとの誓ひである、外に向つて唯に物質的のみならず精神上の光りを與ふる處の國家たらしむるであるので、唯野育ちの僻の人野生の僻の國家として滿足しないのである、我大日本帝國の絶對雄大なる美點をなす〳〵發揮して世界最後の文明をも保障せんとするのである、日蓮上人は口を開けば國精と云ふ、國精とは勅語にある精華と云ふことで、即ち此日本の國は所謂天壤無窮の皇室を戴き億兆一心の忠愛を捧げ、この無窮の靈威と億兆の忠愛との結び付いて居る所が精華である、上人の國精とは皇室の御尊嚴のみを見るのではなくして御皇室に於ける處の大御心の絶對なること、億兆一心の忠愛の心との二者の結合である、此忠愛の心と仁愛の心の結合する處に國家は存立して居るのである、國士の本領は内は人民の安寧幸福を圖り、外は世界に對して發展して行く力を養はねばならぬ、日蓮上人の一乘の教はこの國士の本領に合致して居るのである、我國家に事ある時には生命を捧げて盡すは勿論なるも、日常生活の上に何時も國家々々とのみ思ふて行く事は出來ない、もつと〳〵〳〵廣い意味に於ての德教を要するのである、それを國家主義者が知らない、國家主義さへ教へれば何も彼も間に合と云ふ風に考へて居るものがあるが、

人生社會の必然の要求はそれだけじや用が濟まない、色々なことが起つて來ます、其處で法華經の如き大なる德教と云ふものが、此國家と結び付くと云ふ事が大切になつて來る、この教と國とが冥合してこゝに始めてあらゆる精神界の要求を滿足さすることが出來る、この國家と德教の結び付いた力が世界の光明になつて發現して行くのである、此國家計りじやなくして德教が伴はねばならぬ、斯かる教と結合せさる國家であつたならば必らずや諸種の憂患を生ずる、西洋の思想が這入つて來ると云ふと社會主義の弊害を受ける、拜金主義の弊害を受ける、個人主義の弊害を受けると云ふことになつて國民の思想界が益々暗黑の有樣になる、是の大切な點が見へぬやうなことでは政治家などと言つて見た處が淺見の人々と言はなければならぬ、日本の國が世界無比の御建國であるは申すまでもない、更に日蓮聖人が一乘の教卽ち世界最大の教を以て日本の國家を愛護し、人間固有の要求を滿たし又世界最後の文明を保障せしめんとするこの最大の偉績を認めねばならぬ如何なる道が出て來ても及ぶことの出來ない最第一の寶典を取つて之を國家に捧げて教と國とを結び付けたのである、是が法と國とを夫婦にしたのである、此意を日蓮上人が言ひ現はして、吾れ日本の柱とならんと申されたのである、今の我大日本帝國は實に野生的國家ではない、野育ちの僻の國家ではない磨きを掛けても何處から眺めても一點の非難すべき處のない金甌無缺の國家である、世界の最後を導く活力と靈光とを有する國家である、これ則ち日蓮に依つて闡明せられたる國家主義である、是が日蓮上人の生涯を貫るいて居る主張であります、上人の遺訓に依う法弟日像は京都に出てこの國家主義を申上げたのである、後醍醐天皇はこの主意に依り法華經を信奉し給ひ又北條覇府を倒すに至つたのである、後醍醐天皇の吉野に御崩れの時は左の手に法華經を取り右の手に劍を按じて御崩れ相成たのである、御遺敕には吾が崩御の後も決して此姿を改めてはならぬとの事で左手に法華經右手に劍を持たせ給ふて吉野の山に葬つてあるのであります

す、この一事は國民の忘るべからざる事であります、明治維新と云ふも建武中興の先例に準據遊されたのである、又南北朝正閏問題に就て色々論議もありましたけれども唯一の證據になつたのは水戸の光國公である、此光國公は日蓮主義の養珠夫人に養はれて勤王主義を唱へ又親房卿も日蓮主義の影響を受けて居られると思ふ、而して南朝正統論の勇將姉崎博士佐藤大佐等の諸氏も皆日蓮上人を尊崇して居られる、之に由つて見るも日蓮上人は唯一宗の祖師と云ふ小さな人じやない、日本人の思想界を導き行く所の精神界の大導師である、小さく見ても眞の日本の國家主義を闡明したる國士である、少し進んで考へますれば、日蓮上人に依つて我國民は道を敎へられ我國家は更に國礎を堅くせられたのであります、實は我々は個人としても之を渴仰し國家としては上人を國師として崇敬すべきであると思ふ、斯の如くならば日蓮上人を會得したものかと思ふ。斯う言ふ意味を一言でいへば、一乘の敎を立てて日本の柱とならんとするが畢生の主張であります。

唯今申します通り貴方がたが信仰を定めらるゝには日本人として國を思ふ思想と宗敎の信仰、現實を尊重する思想と高遠なる理想、國家と個人、國家と眞理、それ等の間に適當なる融合統一を示めし給ふたので、斯かる偉人が歩いて行けばすぐ行くことの出來る我大日本の國内に誕生せられたことは、我々國民の誇りであり又喜びであると思ふ（完）

報道

○東京敎況

◎妙敎婦人會　四月十六日例會講演を本會に開いた幹事は三月以來本多大僧正を始め諸講師の關西巡敎の途にのぼられたので參聽者如何にと思ひしも我が會員は既に熱實の信仰に住していまや修養を積み德善を重れて光りある法悅の生活に在りて努力向上の進路を歩みつゝあるものであるから一たび案内狀に接するや參會せらるゝを信じて例によりて洩れなく通知を發した豫想の如く定刻より順次參會するもの八十餘名を算し關田僧都の導師にて國泰院昌の新念法要を修行して左の講題にて熱心なる傳長舌を振はれた

妙敎婦人　釋尊の降誕　荻川眞隆師

今度乾隆師

荻川講師の妙敎信仰の婦人の美德を擧げて家庭敎育の本義を說き信仰に活きてこそ始めて家庭の圓滿と平和を得べしと結論し今度講師は釋尊の降誕によりて人は始めて意義ある生活に入るを得たりとて其大活動大慈悲を讃嘆して信仰の歸着點を示されたので聽法者は何れも一段の信仰の度を高むるものがあつたに相違ない講演が了りて茶菓を喫し散會したるは午後四時半であつた

◎東京天晴會　四月の例會は二十二日神田一橋學士會に開いた定刻前より林少將佐藤海軍大佐を先頭として其方面に於ける勇將たる如名の各會員は陸續詰めかけられて各自研鑽の結論的意見を披瀝し議論風發壯快活何れも有益なる學說論議であつて傾聽に價せざるものはない時針午後の四點を報じたので本多日生師は我國將來の宗敎と日蓮主義と云つる大論題を提げて講壇にのぼり我國體の萬邦に卓絕せる所以と凜乎たる國精の厳存せる理義より說き起して此の精粹と融合し其の基礎となりて發達すべき特質の存する宗敎でなければ採用すべきでないことを論斷し日蓮主義は眞に我國體の精粹を發揮すべき大德敎であつて少しも缺點なく圓滿する所がない日蓮主義は國を思ふ思想と宗敎の信仰亦現實尊重の思想と高遠なる理想さらに個人と國家及び國家と眞理其等の間に極めて適當なる融合統一を示されてあるので日蓮主義は將來の宗敎として仰り崇敬を擧ぐべき絕待の地位資格を有する旨を說きなほ一段を進めて本題を評論せられんとせしも規定の時間になつたので次回に續行講演することゝして降壇せられ暫時休憩の後小林文學士は日蓮上人の樂天主義と云へる輕妙にして卓拔なる講題を掲げて例の流暢酒脫の快辯を振ふて世人の所謂樂天主義に關する思想を解剖し其多くは樂天ではない强いて名けて樂世主義とも云ふべきであるとして各方面より縱横に論評し去り眞に樂天主義者を求むるならば日蓮其人であると斷案を下し彼の忍ぶ可らざる迫害艱難の裡にあるも何等不屈の態度なく一難加はるごとに益々其所信抱負の實現を企圖し泰然悠々として現世の苦悲のうちに大光明ある生涯を送られたるが如きは現時代の人士は以て大に擧び上人の高風人格に私淑する所なくてはならぬとて酒々一時間半に亘りて豐富なる引例適證を出して詳論せられたが何れも論調整然にして資料該博なので研鑽者の爲には多大の參考と利益となることと信ずるのであるそうして講演が終ると晩餐の食堂が開かれた歡談笑語和氣藹々裡に食堂は閉ぢられたが此日會員の外稱書記官鄭永邦君は清國公使館付を命ぜられたので會員一同は乾杯を擧げて告別と健康を祈りた亦新たに會員になられた方は海軍少佐宮地茂三郎君同小牧自然君弁護士梅田幸一郎君實業家澤田治助君の四名であつた。

◎品川布敎　品川妙國寺は四月八日妙蓮寺は二十八日演說會を開き荻川僧都今度僧正の日蓮上人の主義信條を總說して堅實なる信仰を奬め無盡の法雨を灑がれた參聽者の何れも多かつたのは法の爲め喜ぶべきことである

◎釋尊降誕會　五月六日六團體の主催にて釋尊降誕會を行ふことに決したので例によりて各會員と新聞雜誌社へ案内狀を發送したそうして門前の廣告會場の準備は遺憾なきまでに整頓をして會場床の間には特に吉田弁護士等の考案によりて古匠を凝らしたそれで觀音堂の全面には十數種の紅赤白黃なんどの草花をもて飾り其自然の復都たる香りのうちに降誕の悉達太子に右の御手を指し左の御手にて地上のものを呼び天上天下唯我獨尊と宣べ給へし今の釋迦牟尼佛は立ち給ふて居る參聽者の總ては憧き釋尊の御前に跪きて何

れも無限の感慨にうたれたやうであつた午後一時一號鐘の鳴るや吉田緯護士は佛陀の人格と云へる講題の下に釋尊出家の年代等に就て多くの學說を引證して多年研鑽の所說を公表し最後に完全なる人格の模範標準は全世界中佛陀なりとして一時間半に亘りて其理義眞相を論じて降壇せられた次に本多大僧正は何を以てか之を讃せんと題して佛陀世尊の大なる六或示現の大慈悲や無限の大活動絕對の大智慧は凡盡の付度し得べからざるものであつて唯だ合掌拜跪して信仰を捧げ救濟應現の御手に縋りて必然佛性の開發に努力すべきものであると云ふ意義について熱誠至誠にして而かも懇切叮嚀なる指教を受けられたことは會員一同靜謐に徹して脊々服膺することであらう午後四時から大法要を修行せられた本多大僧正は帝國大學の樹治學會講演に出席せられたので野口僧正大導師として僧員十數名を率へ報恩謝德の妙味を捧げ松本研護士は各團體代表者として左の發願文を奉讀せられた

南無本門常住之三寶護法列位の諸天善神知見聖覽維持明治四十四年五月六日陰曆四月八日に相當するを以て六團體協同して慕しく五種の妙行を修し我等一切衆生の主師親たる久遠實成大慈教主釋迦牟尼世尊の御降誕を祝し奉り紀念大法會を擧行し奉る仰ぎ願くは此白善に酬へては大慈大悲の加被力を以て王佛二法の冥合を實現せしめ併せて會衆一同現當所願成辦ならしめ給ひ

六團體代表　松本郁太郎敬白

法要が終ると菓子と折詰辯當と正宗とで晩餐會に開かれた堂の狹いのに百六十餘名の人員であるから普通の會合ならば混雜を極むるのであるが其點は流石に模範的信仰家のみであるから靜穩なものである參會者の重なる方は矢野大審院檢事同夫人小笠原子爵石橋海軍少將五島子爵日高海軍少佐石渕歩兵中佐赤尾辯護士同夫人新宮嘉作氏同夫人其他知名の紳士夫人多く頗る盛會であつた。

◎德敎青年會一周年記念講演

毎月一日十五日二回づゝ實業青年子弟の爲めに道德宗教を基礎として精神修養講演を開きつゝありし、德教青年會は、其後關田講師及荒井重雄中野西川岩戸の各幹事等の盡力に依り、追々隆盛に赴きたるが、昨年發會已來一周年に達したるを以て、當五月節句の日を以て第一周年記念講演を本部たる淺草南松山町法成寺に開催したり、是より先き約四千枚の講演廣告畫を郵便廣告に託して、東京市內の要地に配布したることゝて、當日は生憎雨天なるも拘らず、數百名の實業各種の青年子弟は、殆んど堂內立錐の餘地なき程集り來りたり、定刻午後一時より左の講演あり

△開會の辭　幹事　荒木半次郎氏

△成功の基礎　主任講師　關田賢叔氏

△聖賢の教　大僧正　本多日生閣下

△實業道德に就て　法學士子爵　五島盛光氏

△修養の樣式　慶應大學教授　柴田一能氏

第一席新井幹事は簡短なる挨拶と共に德教青年會の趣意書を朗讀し、第二席關田氏は同會の設立已來主任講師としての經營より說き、最初は會員共に十六七名の聽衆より外なく、雨天なその時は僅々四五名の時もありしも會員等の不斷の努力は今や一年後の今日斯く多くの來聽あり、今後も益ます進まんのみ、是れ即ち本會の成功の方針なりと喝破し、其れより諸種の方面より成功の基礎を說明し、第三席に本多大僧正は今日の世多く倫理道德を說くも永久的の教育を缺き不朽の道を傳ふるものなし何を以て世道人心の頹廢を救ふを得んや是れ古聖賢の教の大切なる所以なり、人間行爲の永久的價値は至誠なり天を敬し天を長るゝ敬虔の念なり、佛教に佛性の開發を重んじ久遠實在の本佛を意識せしめんとするは宇宙人生の秘奧を敎へて、修養の第一義を傳授するなりとて、種々古聖賢の訓言を採用して懇々滿堂の青年を訓誨し、第四席五島盛光子爵は、五節句の時も南無妙法蓮華經の聖語を引きて、諸君が淺薄なる娛樂に耽ちずして今日の佳節を利用し修養講演を聞かんと心掛くるは最も感すべし今や我國の狀態は從らに一等國などと誇り居る時に非ず、更に實業等の方面に大發展を心掛るを要すとして種々の訓誡と共に適切なる例を多く擧げ最後に佐久間大尉の性行を說明忠實職務に殉したるを稱揚し何種の職に在るものと雖此の覺悟を要すとて降壇し、第四席柴田氏は修養に肉體上と精神との二面あることより說き起し、肉體上には身體の健全を期し精神上には智慧の眞摯な

る發達を遂ぐべきを心掛けべし、又人の性行には多血質、神經質、膠汁質、粘液質の四種あり、之を能く考へて短を捨て長を補ひ以て修養を謀らば人格完成に於て大益あらんとて此の間豐富なる材料にて熱誠自在的輕妙の辯を振つて講說せり、時に五時半閉會を告げ、更に跡に殘りし會員四十名は茶話會を催ふし茶菓壽司等を喫しつゝ、此間關田講師の本會將來の方針及び會員一同の覺悟に關する訓誨あり、會員數名の感想談ありて、一同萬歲を三唱し和氣藹々の裡に嬉々然として散會せり時に八時半。

○千葉縣通信

近代文明の養として教育の施設著しく發達し特に義務教育と中等教育とは完備を告げつゝあるはまことに慶すべきこと也然れども中等教育はあまりに實際とかけはなれたる教育にして地方農商の町村に於ける生活には其關係甚だ迂遠なるの感あり則ち中等教育の缺陷は非實際的に傾き居るは勿論中等教育は期間長くして資產あるものにあらざれば教養するを得ざるを以て教育に志あるものはつねにこの缺陷を補はんとして苦心慘憺しつゝある所なり而して此の要求に應じて設立せられたるは大瀧實業補習學校なりとす同校設立の起原は四十三年五月の頃より千葉縣尙風會員有志の間に於て說を起し後顯本宗會長本多日生師其他の主唱となり途に同宗ば補助費を決議して其設立の遠かなるべきを促がし地方教育の缺陷を補はんとせしかば布田中田日達氏は大綱町の商業組合と協商して其設立を決し四月三十日開校の式典を擧ずるに至れり當日井口教授は補習學校生五十餘名大津教授に支學林生を率へて本多日生師の出迎を爲し午前十時本多師は野口總監井村部長三上錄事を從へて着せられ中田邸に休憩後式場に臨まる校門には アーチを作りて祝開校の幟類を掲げ運動場は萬國旗と餘興の飾相撲花火などの設けあり午前十一時式に入り井口教授の挨拶と教育勅語の奉讀終りて岩佐郵便局長の工事報告來賓石井小學校長大綱町長東金高等女學校長工藝學校長支學林教授の祝辭朗讀あり本多日生師は學生に對して堅實なる確信に生き光りある生涯を送るべく懇示懇說せられ校長中田日達師の答辭ありて式を撤し來賓には折詰辯當を供し食堂に在りては來賓皆齊しく補習教育のために充分の援助を與ふるを約し歡談笑語のうちに餘興は各所に開かれ附近より此盛況を觀覽せんとて集れるもの數百名にのぼりさしも廣き境內も立錐の地なきに至り頗る盛會にてありき

○第三部監督布教日誌

第三部（北陸、畿內、中國、山陰、九州）監督布教師能仁事一僧正より第十七教區（山口縣、福岡縣）監督布教開始の通報を受けたる予は直ちに部內各寺巡回日割を通告して其準備を命じ二月二十七日山口縣阿武郡明木村に僧正を迎へて本宗信徒たる同所の郵便局長兒玉清藏氏の宅に休憩旋錫を改めて腕車を驅て午後四時長州萩に着し多數信徒の歡迎を受け乙古萩於蓮寺に入る怪ふに其の地や維新革命の國土を產し現代の聖世實現は主として此の天地に萌芽の力を存せしなり彼の勤王の國士吉田松陰、木戸松菊、高杉晉作等の諸士は則ち其慈たる也次で伊藤博文、山縣有朋、桂太郎、曾禰荒助等の明治元勳亦松陰塾の門生たりしなり其他實業家毛利傳三郎を出だし文武の官に仕ふるもの甚た多し而して教育機關としては有名なる明倫館小學校あり經立萩中學校あり私立として修善女學校あり實業中學校あり尙郡立高等女學校は敷地の撰定中にして亦甚だ旺也更に宗教界に至ては何等の活動を見す漫りに僧俗共に惰眠を貪り夢國なる眞夜中にあるの狀態也予等は二十七日二十八日の兩夜唐樋町毒座なる劇場に講演會を開き所謂法鼓を鳴らし警鐘を打つて彼等の覺醒を促がしたり

開會之旨趣　坂井　英俊

統一的宗教　朝倉　俊達

日蓮主義を基礎とせる社會主義對治藥　能仁　事一

閉會之辭　吉見　俊教

社會主義てふ文字に驚きしや萩警察署長の部長以下數名を引率れ演壇判事と共に臨席せられしは頗る異彩を放てるなり聽衆九百講演八時間多大なる教化を與て能仁僧正が現代社會の缺陷を擧げて根底的原因を指摘し大聖日蓮の人格教義を鼓吹して御國體論に及び尊王愛國の大義名分を縱橫に痛論して南北朝問題に入り混亂せる思想界を救ふものは法華經統一主義なり委曲せる國民の精神を救ふものは日蓮主義なり此れ即ち一佛一王主義にして眞佛

教なり活宗教なりと論斷せられたるには何れも無限の感に入りたるものゝ如し廿八日晝間と三月一、二、三、晝夜七回は信男信女のために參蓮寺の本堂にて說教修法を爲せり

說教時間(四回)四時三十分間　朝倉隨行員

聽衆人員五百二十人

說教時間(七回)十時間　能仁　僧正

聽衆人員九百二十五人

三日午後は日本海に面せる萩灣頭濤白き所にて五間四面之大祭壇を設け天幕を引き繞らし戰役病没者并に水難横死者の爲に施餓鬼法會を修し了つて會衆老若四五百名の爲に能仁僧正は懇特なる講演を爲し多大の教益を與へて大衆聞繞の中に參蓮寺へ歸り井上大尉津田法學士等の發企に係る慰勞會に臨み一同歡を盡して散會せり翌四日午前中は紀念撮影をなして檀信徒に見送られ午後一時大津郡三隅村樫木向ふ行程四里餘夫を勞して簿暮了性院に着す該寺は日法上人作聖觀等身の立像あるを以て名あり昨冬住職死去後總て法務は予が擔當し來りし處二月二十日附を以て兼務住職の辭令下附ありたれば幸に僧正の列席を得て入寺を披露し四日午後七時より十二時迄五日午後二時より四時迄で

說教時間(二回)三時間　朝倉隨行員

聽衆人員二百五十名

說教(二回)五時間　能仁　僧正

聽衆人員二百七十名

三月五日午前は先代日靜師百ヶ日法要を修し午後四時半檀信徒に別を告げ一里を隔つる三隅市に向ひて性院總代中村勇吉氏宅に宿泊し有志の請を容れて同所にある眞宗說教所に演說會を開く夜に入りて少雨加るに强風吹き荒み面を迎くべき樣もなき天候なるにかゝはらず他宗の巢窟に此聖業を企つ會するもの一百四十名內七名本宗信徒にして他は皆檀門の徒なり

道法の觀念　朝倉隨行員

道德修養と宗教意識　能仁　僧正

八時開會十時四十分終了三隅青年會幹事須子清範氏は土地の名產硝子鈔を送りて僧正の勞を犒たり

◎三月六日　昨夜來の風雨尚ほ止まず天候險惡なるも最近法華信仰に入られたる青年信徒河村文三郎氏の後を慕ひて遠く萩より來る中村一家の人々好意を謝し雨中馬車を驅せて瀨戸崎に向ふ此の地や鯨網を以て名あり途中善門寺住職總代人等の出迎に會して午後二時善門寺に着す僧崎善門寺は八品派にして現住職末澤祖俊師は温良なる護法心厚き好法師にて昨年予が布教に行きたる因緣にて我が監督布教師能仁上人に一周間の講演願ひ出でたるも時日なく六七八三日間掛錫する事となり晝夜の說教演說多大なる効果を奏し此寺近來未曾有の盛況を呈し候

◎說教(三回)四時間信徒百九十六人　朝倉　隨員

◎同(三回)五時間信徒二百二十人　能仁　僧正

津山の信徒島越勘一氏程近き深川稅務署に奉職し居られしが來り會して夜間の演說會には島崎せられ河野醫師、寺戸村長、飯田少佐等の信仰談あり(能仁僧正の布教實感記に讓る)

開會の一辭　河村文三郎

所感　島越　勘一

(道義と信仰、御勅語と教法)　朝倉隨行員

(道德修養と宗教意識)

(本尊と信仰)　能仁　僧正

三夜通じて十時間の講演信徒合計二百九十名なるも皆な近來改宗したる人々にして其熱心なる感度眞に敬すべきものあり最終の夜は墓ひ來る信男女誰一句彼一句秩別的信仰談起り終に一睡も取る能はず三月九日午前一時の眞夜中善門寺を辭し行程九里の山道を人車に托し馬の前引きに依り午前九時の頃伊佐驛に着し山陽本線に出で午後二時馬關海峽を渡りて九州に入り直行渡瀨驛に下車す時午後七時十二分總代信徒の出迎を受けて新興寺に到着す素直なる信徒等は八時開會の廣告に因り堂に會するもの一百二十二人休憩の間もなく直に開會

道法觀念　朝倉　隨員

道德修養論　能仁　僧正

三月十日は午前八時より十時半まで遠く太平田地方より來れる信徒のために予は四失論を講じ僧正は十時半より十二時半迄で宗教意識に就て懇篤丁寧に從音を傳ふ聽衆信徒七十一人中には感極まり涕泣するものさへ見受けたり男子より老人より妙齡の婦人が熱心に修法唱題を勤むるは此所新興寺の異彩なり午後一時より雨中强風と戰ふて矢筈川を渡り柳河妙經寺に向ひ三時到着す四時より五時まで信徒

十七人のために予は二世救濟を說く夜に入り演說會

開會の辭　森　俊榮

暴風と八風　朝倉　俊達

圓滿なる宗教　能仁　僧正

三月十一日雨晴れ天朗なり九時より十時まで予は監督布教の趣旨より信徒の心得を說き僧正は十時より十一時半まで法華修行の安心を懇切周到に說述せられ參詣の信徒は三回の講演を通じて五十六人なるも此の寺としては大成功なり(實感記に讓る)能仁僧正に對して總代兼子德次郎氏が今後の發展を契はれたる等目出度限りなり

久留米より迎に來れる平岡保太郎氏と博多より村上忠氏と同伴妙經寺を後に矢部川驛に出で二時五十分久留米驛に下車す待受けられし總代信徒數十名と馳車を驅りて本泰寺に入る寺主池澤快整師は上總に歸り出海俊義師寺務を擔任せらる夜に入り說教八時より九時まで予は法華宗門の地位を論じ九時より十一時まで能仁僧正に信仰と本尊とに就て大法論を戰ぜらる

三月十二日午前は僧正と村上忠氏と予と勤王の志士高山彦九郎先生の墓前に詣で當時を偲び午後は出海師の願に依り新發意(十二歲)の得度式を擧げ僧正は本門壽量の大戒を授け予は銘名師となりて慶應なる修法を了り二時より三時まで予は得度式に就て案愚入無爲眞實報恩の意義を說き僧正は三時より五時まで安心論を以て大眞法教化せられ七十八名の信徒をして歡喜の涙を流さしめたり此夜太平田の神士計員與三郎氏は得度式の盛儀なるを見て法悅の餘り所感演說をなすこと一時間半予は三十分斗り信仰の要義を語り僧正は日蓮上人の神靈に就て堂々二時間に亘りて諄々の辯を振るひ信徒五十五名

三月十三日は田隈平岡氏等の案內にて久留米自慢の玉水館に入浴して身心を淸め午後二時より三時半まで予は女性觀を論じ女人成佛を說き四時より六時迄僧正は本尊觀れ信仰正からざる教團は精神の亡びたる形骸なりと絕叫して日宗信徒の覺醒を促し大なる刺擊を與へ同夜は最後の公開演說を開かんとて大雨を冒して來り會するもの九十八名なるも皆な篤信知名の士女にして大に予等の心を强くせしめたり日宗の僧高宮晃師なる人潛入演說をなすに至れり以て其の効果の大なる知るべし

▽開會辭　出海　俊義

▽活信仰　村上　忠

▽日蓮上人の人格に就て　針貝與三郎

▽法華經主義の實現　河倉布教師

▽日蓮主義を基礎とせる社會主義對治策　能仁監督布教師

三月十四日午前十時本泰寺より送り來れる多數の信徒に別れを告げて久留米驛より再び山口縣に向ふ出海俊義氏村上忠氏は同乘島栖まで送り來る正午下關に着し午後六時山陽線下松驛に下車して切山に向ひ途中吉田義寧師の信徒を率ゆるに會して九時秋林寺に入る同夜十時より予は監督布教の要旨より開法の大事に及び僧正はマトマツタ信仰を極めて平易に說明され十二時に至る信者五十三名

◎三月十五日午前は休憩午後四時より予は三慧と四失を論じて修行の心得を說く僧正は五時より六時半まで本尊の統一を說ひて宗教客體の大切なる事を敎ゆ信徒六十八人夜九時より十時まで予は玉耶經の七婦を上げ懇慢を戒め僧正は十時より十一時半まで本佛の感應を說きて多大なる教益を與へられたり信者九十二人內男三十五名本成寺派の僧德山本正寺住職中尾啓亮師は信徒同伴昨夜より來會熱心に傾聽せられたり

◎三月十六日住職總代等に見送られ岩國に向ひ午後二時岩國驛に着し雨中電車に乘り三時半長久寺に入る柳井津の篤信家篠田利兵衛氏等の歡待を受け登富町松聲館を旅舍に指定さる四時より三十分同斗り予は監督布教の任務より信徒の心得を說く四時半より六時まで信仰の統一を僧正は熱心に論定せらる夜に入り演說會

開會辭　篠田利兵衛

獨得の成佛　中村　明法

四失論　朝倉隨行員

統一的大本尊　能仁　上人

此日午後一時頃より少雨夜に入り一層激烈盛を覺すが如きにも拘はらず約五十名の聽衆を見る中村明法氏の熱烈知るべきなり僧正より懇々勸請式に就て訓示する處あり

◎三月十七日中村師篠田氏等に送られ六時四十分岩國驛發車八時廣島驛着同驛長國友初二氏の先導にて待合室に休憩大橋島田兩師井に總代信徒の歡迎を受け八時半松川町妙詠寺に入る午後二時より公開演說

宗教信仰の標準　島田顯慈師
人生の大事　鎌倉暎師
本化的生活　朝倉布教師
大神觀　能仁　僧正

聽衆八十三名滿州守備として不日出發すべき第五師團將校山内大尉の如きは能仁僧正の大神觀に依りて眞に敬神愛國の意義を了せりと

◎三月十八日午前九時より廣島聯員の爲めに鐵道院樓上にて講話する事となり國友驛長の紹介にて能仁僧正は道德修養の眞意義を明にし三惡經に因りて此れが實行を敎へ人格を高めて一大德敎に入るべきを懇切丁寧に論ぜられ朝倉國行員は後板に圖解して悟了し易からんと鈞め十一時半に了る日蓮主義の基礎より立論せられたる事として一句一句彼等聽衆の腦腑に注入し二時間半に亘る大演說多大なる訓育を得て驛長車掌長は法悅に住し更に一回明日九時より願ひたしとの望みを容れ正午新川場本照寺に入る午後三時より四時まで予は國思修の三慧合行の大事を說く僧正は四時より五時まで內省自覺の大切なることより三力合成の妙談を說き毒蛇狂子の譬喩を以て結論す

信徒七十五人內僧一人男五十人

◎三月十九日午前九時より十一時まで鐵道院樓上にて昨日聞くを得ざりし驛員八十二名のために能仁上人は（偉人研究と吾人の自覺）てふ題下にて明晰なる講演を試み國友驛長の望を全ふされたり午後二時より本照寺にて演說會

開會辭　野老乾爲師

危險思想と法華經主義　井村講師、日蓮を生める法華經　能仁講師、日本國と日本人　國友講師、日蓮主義と日本の國體　岡田講師、日本は法治國か敎治國か　野口講師、日蓮主義　本多大僧正

此發表演說に東京帝大講師小林一郞氏の出演を乞ふべく交涉中の所都合上六日來演の事になりしが聽衆は堂に充ち各辯士の論道に或は拍手急雨の如く起り或は運て項門の一針を加へられたる等實に多大の感動を與へ局外の軍人警吏新聞記者等の感激せしもの少なからず爲に日々聽講者殖加し每夜の演說會も非常の盛會にて其辯士と演題は如左

第二日　佛敎の正路　松崎事成師、健全なる宗敎　梶木日種師、佛敎の感應主　石川顯隆師、日蓮聖人の臣道論　岡田講師、一法を以て之を讀せん　本多大僧正

第三日　國民道德と法華經　金光孝碩、吾人の位　原田容應師、危險思想と法華經主義　井村講師、本尊の大慈と佛子の自覺　能仁講師、最善の信仰形式　本多大僧正

第四日　法華の生活　高木本順師、聖像を拜して　川崎英龍師、二大宗敎に就て　大橋日祚師、心を九識に持ち行を六識にせよ　野口講師、光ある信仰　本多大僧正

第五日　自日性　三宅舜次氏、日蓮主義とコスモポリタン　小西憲三氏、理の敎と情の敎　小林一郞氏、我國將來の宗敎と日蓮主義　本多大僧正

第六日　吾人の信仰　牧田英長師、名敎宣傳とアピリティ！　橫山南山氏、三力契合　成

聖日蓮と英雄　大橋　日製
法華主義實現　朝倉　俊達
日蓮主義を基礎とせる社會主義對治策　能仁　事一

時恵問題を掲げし事でさしも廣き本堂立錐の餘地なき盛況にて安藝門徒の中心に此の快事を見る喜しき說午後五時半閉會

◎三月二十日本照寺先代日正上人十七回忌法要を營む能仁僧正の導師にて午後二時より始め修法燒香了つて能仁上人は一百三十七名の禮信徒に對して信心の感應を說示さる中國新聞記者入澤涼月君の紹介にて立海流の琵琶（加藤法正）は名家足立紫光君に依りて彈奏せられ壯麗なる吟聲巧妙なる聲調豪壯となり悲哀となり滿堂の人々に多大の感動を與へられ大橋日製師の心を喜ばせる警座を受け午後九時解散せり予は僧正に先き立ちて十一時の夜行にて歸社し僧正は翌廿一日歸國せられたり此の行廿二日間十ケ所四十回の講演覺障なく結了せるは勿論佛天の加護なるも又た布敎區內各寺住職信徒各位が熱烈なる道念の突發し來れるためと爰に謹で感謝の意を表するものなり。（朝倉俊達記）

○西部講習會通信

本宗西部講習會は既定の如く四月二日より八日までの一週間姫路妙立寺に於て開催せられたり今其大要を略記せん

委員野老師已下眞俗各々任務を擔當して敎日前より晝夜準備に忙はしく內外の案內及新聞廣告等も能く行き亘りて一日には戰場の如き劇忙の中に講師歡迎の時間をまつ最も緊て計畫したる二千五百金にて改築すべき客殿庫裏は此度の間に合はざりしかど本堂を講堂として客殿庫裏及隣りの參詣寺の內外に悉く電燈を思ふ存分に點じ夜會晝の如く一切の準備全く成り是にて會員と傍聽者の多くを收容せば成功也萬歲也と互に喜びつゝ奔走せる人々の勇ましさよ岡山和氣の布敎を終りて到着すべき本多大僧正の一行は同日午後三時と決定せしかど數十名の眞俗賑々しく驛に向ひプラットホームに歡迎し忽ち三十輪の車聲轆々として會場に着しぬ野口岡田國友の諸講師も同行したり井村講師は獨り東都より先着せられ之に前後して會員續々つめかけ金澤の成島師を先登に東は遠州見付の山本師より西は廣島の島田大橋の兩師遠近の道友皆會し祝福法悅の歡聲山內に滿ち清新の氣大に張ふ而して夜運く寢れ翌れば二日午前八時彌々開講式を擧ぐ委員總代野老師の式辭會員總代成島師の祝辭姫路敎團總代笹田嘉久次氏の祝辭等ありて直に講義に移る講師と講題は

一　佛敎の眞髓　本多大僧正
一　佛敎結人觀　野口日主師
一　開結二經の研究　井村日成師
一　本門の題目　岡田養叔師
　　科外講師及講題
一　聖日蓮の大神觀　能仁事一師
一　國體及び國民性　國友日祚師

斯て午後七時より市內武德殿に於て本會發表大演說會を開き聽衆千に近く後等に甚大の刺激を與へたり其辯士と講題は

島薩藩師、國體と國民性　國友講師、信仰の警策　本多大僧正

右の內第五日は武德殿に於て小林講師を專ら勞すべく公開せられ聽衆は定刻前より立錐の餘地なきまでに來會し極めて盛大なりき而して小林氏は翌朝更に妙立寺に於て一場の講演を試みられ且紀念撮影にも參加して後東上せられたり

如斯晝夜の講演も八日午前十一時に結了し直に閉會式を行ふ委員總代野老師の式辭聽講敎師總代原田容廣師の謝辭姫路敎團總代笹田嘉久次氏の謝辭同山敎團總代橫山南山氏の謝辭ありて次に最も珍たり例外の好果たるは元警察署長たりし頃より宗敎の弊害多く得益淺きを見て宗敎無用論に固定せりし寺門武正氏が七日間の講義演說に感激して心機一轉頓に信敎の美味を覺りしより今後己れ改宗する耳ならず替く親疎を改宗せしめんと發誓して其實感を陳べたる大演說又十四師團警治隊長堤大佐が是迄佛耶孔儒諸多の講演を聞くも曾て敬服するに至らず寧ろ皆其敎祖敎義の奴隸たるに若かず現時の說明者には信賴せずして自ら其根本敎義に接觸せんには然れども一回試に往て見んと來りし所意外にも感服し一週間晝夜共熱心に聽講してその理想的講演は乃ち日蓮主義に由て始めて之を認めたり宜しく日本軍隊の精神敎育は日蓮主義に規定すべし予は極力之を唱道せんとの演說及び新聞記者大浦某の所感演說等なりき如是本宗專門の講習會にして門外に多大の効果を與たるは恐らく空前なるべく法隆の吉兆として大に祝せずんばあるべからず聽講敎師が中項決議して專門的講義耳に止らず門外者の爲めに通俗平易の講話を開かしめんことを請願したると相待て如何に日蓮主義が一般世間に歡迎され普遍せんとする勢の高まれるかを推知すべきなり清く爰に閉會式を結びとして野老師の發聲にて萬歲を三唱しぬ更に午後三時を期して市內龜樂園に一大感觀會を開き百餘の會衆笑も感話をのべ法味に滿ち酒肴に足り身意快然として主客共に盛歡を盡して退散せられたり

（高田日輔）

○京都敎報

總本山妙蓮寺大法會　例年の如く四月十一日より三日間午前午後に亘りて正法興立・皇道繁榮・財團製費員先祖代々・貴堂施主祖先靈菩提、併て正法外護の信徒現當二世所願成就の爲めに大法會を修す、大導師本多管長猊下には三月下旬來岡山地方の御巡敎を終て姫路本宗西部講習會に御臨席後、十日午後九時野口總監以下を從へさせられ入山せらる、全國より登山の僧は三十餘名、信徒の登山、參詣者亦例年に比して其數多く極めて壯觀なる大法會なりき、每日午後三時より管長猊下及其他の經筵なるの說敎あり、且つ每夜講堂に於て大演說會を開催す、聽衆每夜三百餘、管長猊下が勝願より出づる熱烈と其雄辯とに加えて全國布敎師諸師の講演に滿堂の聽衆醉るが如く深く日蓮主義の必要を認めしが如し今其演題及辯士を紹介せば

開會の辭　野老本山部長

一心欲見佛　木村　義明

〃　〃　原田　容廣

信仰の力　萩原　啓門

畢竟住一乘（其一）　本多大僧正猊下

十二日

人　朝倉　一乘

現代の思想と日蓮主義　國友　日城

國　女　論　野口　日主

畢竟住一乘（其二）　本田大僧正猊下

十三日

我國の文明と吾人の覺悟　京藤　義應

信　念　小川　玉秀

虔信主義の修養　秋葉　顯正

二世救濟　成島　隆康

父母念子　井村部長代　石川　顯隆

聖日蓮の對神觀　能仁　亭一

尚本山布教部より統一三月號を五百部東京品川淺尾清造氏より寄贈にかゝる四個格言の施本三百部を配布したり

十三日午後十時より大廣間に於て慰勞會を開き管長猊下が懇篤なる講話ありて宗門の將來を樂觀し併て希望せらるゝ處ありて十二時穿出度散會せり

十四日午後四時、管長猊下及野口總監の一行は神戸市の布教に出發せられ本山役員信徒總代結人會員等見送りたり

◎京都天晴會春季大會　四月十七日午後三時妙滿寺講堂に開く會する者百餘人本多大僧正にに神戸の布教を終へて十七日午後一時入洛せられ京都天晴會の懇望を容れて一場の講演をせられたり

開會の辭　幹事　梅室榮太郎

所　感　野老　乾爲

所　感　大阪天晴會幹事　中野　勇平

予が日蓮主義を主張する所以　東京天晴會幹事　松本鄰太郎

佛教正調論　野口　日主

日蓮聖人の國家觀　本多大僧正

講演會終つて方丈廣間に於て慰親會を開く出席者五十名酒食の間所感演說あり將來の希望を述ぶる者ありて十時萬歲三唱して無事閉會せり

管長猊下には翌十八日午後二時七條驛出發東海道巡教の途につかれたり

◎聖龍門下同志會　四月二十日京都日蓮宗妙顯寺に研究會を開き河合日長僧正の觀心本尊くの講義あり、同夜同寺に例會を開く

◎妙滿寺持寄講　本年四月第十五回持寄講滿期につき一般掛金者に對して掛金の携展を丁し更に五月より新に第十六回を開設し西村治兵衛同吉右衛門氏を現金預りとし一般に掛金を募集し其利金を以て本山經費に當るべく本山役員及瀧野、吉川、秋山の信徒總代諸氏其事務に從事しつゝあり

○神戸教況

本多管長猊下の一行は大阪天晴會出演の途神戸顯本法華布教所主任上田智量師及び信徒一同の招待に應ぜられ去る四月拾四日十五日兩日間同市最好位置たる湊東倶樂部に於て大演說を開けり其二日間の演題及び講師は

十四日午後七時開會

開會の辭　主　上田智量師

唯我一人　大橋日義師

法華經開顯の時　能仁亭一師

宇宙第一の寶典　野口日主師

佛教の眞髓（其一）　管長　猊下

十五日午後一時開會

開會の辭　吉岡幸七氏

活ける宗教　横山惠正師

日本國と壽量品　上田智量師

偉人研究と人格修養　能仁亭一師

夢と修養　野口日主師

佛教の眞髓（其二）　管長　猊下

兩日聽衆滿場各講師の熱心なる演說は七百名の聽衆をして終始靜肅に傾聽せしめ中にはノートに筆記するもの五六名も見受られコトニ今年は共進會開會中にて多大なる成功といふべきなり翌六十日管長猊下には野口師能仁師等を隨へ大阪天晴會講演に出發せられたり

○大阪天晴會紀念大會

春色紫濃櫻花爛漫の好時節、維時明治四十四年四月十六日大阪中之島公園地內大阪ホテル大廣間に於て大阪天晴會設立滿一周年紀念大講演會を開催す、先是大會開催の旨を大阪朝日毎日株式日報等の紙上に廣告し併せて市內知名の人士各新聞記者に招待狀を發しぬ當日は各新聞に案內報道の記事を掲げられて定刻以前より來聽者續集す、午後一時幹事池田爲三郎氏は「開會の辭」を述べ次に平井業幹事清水英吉二氏の所感演說岡山能仁等一氏の祝辭

的演說あり更に池田幹事は東京天晴會員等左記諸名士の祝電を披露す

陸軍少將　林　太一郎君

澤軍大佐子爵　小笠原長生君

結護士　吉田　珍雄君

東京幹事　關田　資叔師

大阪幹事　山岡順太郎君

夫より諸講師の講演に入る

佛教正閏論　野口　日主師

宗教と道德　文學博士　上田　敏君

現代と宗教　結　護士　松本鄰太郎君

日蓮主義　大　僧　正　本多　日生師

野口講師は先づ南北朝正閏論より說起して佛教各宗派の正不正を論斷する所說平明聽者能く領納す。上田講師は宗教と道德との定義識分等を科學的に說示して現代の要求を明かさる所說詳會衆謹聽す松本講師は法然其他諸宗の祖師も我が日蓮上人とを比較論評してその人格主義戰れか現代に適合するか將た現代を指導するに足るかと熱烈に論辯して日蓮主義を鼓吹さる拍手喝采大に滿場を搖す本多講師に先づ日蓮主義てふ稱呼より說起し現代各種の主義を論評し或く皆日蓮主義を以て開顯せられ指導せられ匡正せられ折伏せられ將た撲滅せらるべき義旨を說示し最後に宗教の撰擇標準を誨へて日蓮主義の眞價を懇說せらる論議痛切聽者悅服す于時午後六時閉會を宜す會衆約五百餘名始終傾聽頗る盛況なりき

續て午後七時より同所に於て講師來賓並に會員の晩餐祝宴會を開く會者三十餘名席上池田幹事會を代表して講師に謝辭を述べ本多講師の答辭あり松本講師は東京天晴會の現況に就て語られ本多師又本會の將來に就て注告せらる夫より卓上演說に移り盛に歡談する中に「天晴會」の名稱に就て論する所あり其要は初め大阪に同一會名を用ゐんとするや發起者親しく東上して東京幹事に諮り即ち將來他に於て會名を濫用せしめざる密約存せり之れ國より世間種義の問題に弄らず全く主義愛護の正しき態度なりと云ふに在り寄語す同志の士女番くは斯議を謹容せよかくて一同和氣藹々裡に眞意を三唱し散會せしは午後九時なりき

○見付教況

從來至つて振はざりしと云ふ見付教壇は一月以來山本師の熱烈なる布教講演により今や顯本の妙義に沿ふもの毎回七八十名を降らず漸次勃興の勢なるにより今回師は管長猊下の御歸京を機とし去る二十一日請待し以て大講演會を開催せり當日山本師は總代人三名を從へ猊下を中泉驛に迎へ午前九時着車同時に腕車を連れ立ち妙寺到着同寺書院に入り少憩後晝餐午後一時開會せり

開會の辭　山本　通辯師

日蓮主義に對する誤解　吉田　堅晴師

宗教とは何ぞや　石川　顯隆師

我國將來の宗教と日蓮主義　本多　大僧正

夜に入りて

開會の辭　山本　通辯師

佛教の中心　石川　顯隆師

大なる故信仰の力　本多　大僧正

晝は聽衆無慮三百夜は堂外に溢る猊下は最も熱誠なる態度にて頭伽の音聲を發し從來佛教諸派の妄想謬見を說破し日蓮上人の主義と信仰之が絢的ならざる人として信賴すべきもの健全なる人として崇敬すべき眞價を有するものなる事を或は經論に訴へ或は書釋により或は比喩に事寄せて懇切叮嚀至らざるなし參集の男女何れも多大の感動を受け各自隨喜の涙を呑んで散會せり

○財團評議員會の狀況

既定の如く四月十四日本部事務所內に開催せる教學財團第五回評議員通常會は午前十時開會市橋理事長事故缺席の爲め中村理事之れに代り先づ抽籤を以て會員の席次を定め夫れより會長を選定し四番岩佐春治君當選並に議會成立し本部支所員より諸般事務の報告を爲し次て第一號議案より順次決議終て一番瀧澤喜八郎氏提出の京都支學林設立の件は當路者と協議する事とし午後二時散會したり左に決議錄を掲げん

決議錄

收入

第一款　基金利子　金二千二百四十圓一錢五厘

第一項　公債利子　金二千百八十圓也

第二項　寄託金利子　金千五百九十五圓也

第二款　前年度剩餘金　金五百八十五圓也

第一項　前年度剩餘金　金六十圓一錢五厘也

支出

第一款　事業費　金二千二百四十圓一錢五厘

支出總額　金千九百圓也

第一項本山費　金二百八十五圓也
第二項學事費　金九百五十圓也
第三項布教費　金四百七十五圓也
第四項經費寺院保護費　金百九十圓也
第二款　法要費　金一百圓也
第一項大法會費　金一百圓也
第三款　事務費　金二百三十五圓也
第一項京都本部費　金七十二圓也
第二項姫路支所費　金六十六圓也
第三項評議員會費　金八十二圓也
第四項振替貯金手數料　金十五錢也
第四款　次年度繰越金　金五圓一錢五厘也
第一項次年度繰越金　金五圓一錢五厘也

右決議候也

明治四十四年四月十四日

一番　瀧澤喜八郎　二番　井村　日成
三番　中村　祐七　四番　岩佐　春治
五番　三宅　六藏　六番　野口　日主
七番　秋山嘉兵衛　八番　野老　乾爲

以上出席者

吉川平兵衛　中田　日達　三宅庄次郎
橋本　善助　藤崎　道明　鈴木　日雄
須山茂三郎　小野　善吉　市川　榮吉
大多和來助　山本熊之助　鶴田　友七
林　誠一　樂師寺弾兵衛　鈴木　金藏
福原豐次郎　林太喜一郎

（以上委任狀提出者）

議長　岩佐　春治　書記　金光　孝穎

大僧正本多日生猊下講述

法華經講演集

序說　如來壽量品

洋裝　美本
正價　金五拾錢
郵稅一部金四錢三部迄金八錢

抑も宗教學上の根本問題は何であるか、即ち宇宙觀と人身觀と超人觀の三種である、故に、宇宙の成立と其實相、吾人の本體と其向上、超人の本體と其力用とに關する、圓滿なる解釋と完全なる知識を得ることが出來ないならば、即ち人生及び自己生存の意義が解らぬので、夢中の生涯と謂はねばならぬ、されば斯の重要問題に就ては、多くの宗教學者が探究研討して居るのであるが、未だ何れも適當なる結論を見出さない、若夫完全にして適切なる解釋を示せるものがあるならば、直ちに進でれも適當べきことである、即ちそれは一切宗教中、大聖佛陀の說き給ひし法華經に於て光顯せられて居る、法華經の實相觀は、即ち宇宙觀にして萬有の本體活動等を論明し、人開會は人身觀にして、吾人の本體と其向上の狀態を說明し、佛陀の顯本は超人觀の妙致を顯はせるもの　あつて、佛陀の本體と妙用とを圓滿に說かれてある、而して法華經中如來壽量品には、極めて明確適切なる解釋を示されて居る、本書は大僧正本多日生猊下、畢生の熱誠と卓越の識見とを以て御講述になられたのである、故に一たび本書を繙かば、明かに古來未解決の大問題を領解するに到り、意義ある人生に處して、光りある活動と向上とを遂ぐるであらう。

殘本僅に百餘部を存するのみ此際申込あらば特價金三十錢にて頒賣す

發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一團
（振替口座東京一二一九）

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉强仕一切各宗の佛具陳列仕置候

正價附

三法堂佛具發賣目錄

小色絲例附（郵券四錢）

注意

佛具と唱すれす。依て特に佛參諸君は。郵券四錢御送附被下候ハヽ迅速呈仕候。此の目錄を御覽あれ。寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも至なから買物安價にでき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り

此の種類數品有之候を以て一々記載する能はす正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の目錄を遂呈仕候。

●佛具一切●過去帳の類●大般若經●一切藏經●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●鈴鐘●半鐘●水鉢●拂子●曲錄●香●珠數●大傘●扇子●中啓●雪洞●錦●金襴類●水引●打敷●和幡●唐幡●人天蓋●樂器類●旌●鬼幡●幡●模●木像●厨子●水●華●經机●盤●懸磬●塵量器●白鉢●水●三寶●寶塔●平椀●刷毛●箸●獻茶器●獻菓子●餐●行鉢●座量器●白鉢●水●板●盛物●高皿●裂●文庫●靈具●棚●線香●香具類●正價附にして御買物全なから自由自在

●佛具卸部　京都市三條通小橋西入　本舗　三法堂藤田總次
特電話二千七百八拾三番　振替貯金番號　大阪一四二五九　東京一二〇七一
●小賣部　同市三條通大橋西入　三法堂佛具陳列場

勤行作法

勤請文、勤行讀誦（方便品十如是自我偈）正行唱題
回向文、受持文、○自我偈讀誦

右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられたるものにして、勤請文、回向文の如き最も簡潔にして而も其要義を遺せす總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの也客月來頒與の求めに應するを得ざりしも今回さらに印刷に付し製本出來致し一般信徒の爲めに之を頒たんとす、御入用の方は前記代金を添へて御申込あらば御送可致候也。

一部代金五錢十部以上一割引郵稅四部毎に金二錢三十錢以下五厘郵券代用不苦
振替口座東京一二一九統一團宛

發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　妙致婦人會

毎月一回十五日發行、一部金六錢稅郵五厘　一ヶ年前金六拾五錢郵稅六錢　代金ハ振替貯金口座東京一二一九番ヘ拂込マレタシ其場合ニハ諸料ノ外ニ金壹錢ヲ追付相成度候

明治四十四年五月十五日印刷發行

發行人　井村日成　編輯人　山根日東　印刷人　鈴木日雄

發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一團

25 11
19 1
65

統一

第百九十六號

我國將來の宗教と日蓮主義

大僧正　本多日生師

御國體に就て

海軍大佐　佐藤鐵太郎君